

セルトリユス

悲劇

コルネイユ 作
小林 卓 訳

読者に

この悲劇に芝居でこの種の詩を成功させる優美な飾りを求めてはならない。ここには甘美な愛も、湧きいづる情熱も、荘重な写実も、悲壮な語りも見つかりはしないだろう。しかしながら、この詩が不興を起すものでないこと、著名な人物の威信や、彼らの利害の重大さ、そして何人かの登場人物の目新しさが優美さの欠如を補ったと言い得る。題材は単純であり、たくさんのよく知られた出来事について、いささかの変更も許されないのであるが、規則に填め込む必要不可欠な理由から時間や場所を圧縮することを強いられた。題材からは女性が得られないので、二人の女性を導入するという創意に依ることを余儀なくされた。もっとも二人の婦人とも私が参照した歴史的事実と十分に両立するものである。お一方はこの時代に生きていた。ポンペの初めの妻でありシルラの娘エミリとの結婚によってシルラと同盟するために、ポンペによって放逐された。この離婚はポンペの生涯を叙述する人達の報告に必ず入れられているが、誰一人としてこの不幸な婦人がどうなったか述べていない。彼らは皆アンティスティと呼んでいるが、ただヒスパニアのジロンヌの司教だけはアリスティという名を与えており、耳に聞こえがよいという理由からこの方を選んだ。著述家が彼女の生涯について黙しているのを存分に利用して彼女に逃亡させたが、彼女を陵辱した敵のもとに留めるよりは、こうする以外為しようがなかったという方が一層真実らしいと思った。この逃亡にはローマの重臣達の手紙によって実をもたらしたただそれだけ真実らしさが加わった。これらの手紙は彼女の手を通してセルトリユスに、ついでペルペンナを通してポンペの手に入ったが私が述べたように廃棄された。もう一人の婦人は我が精神が生み出した純粹な観念である。とはいえ、歴史の中にくらかの

痕跡を留めている。歴史に依れば、シルラの党に抵抗する首領とするためにリュジタニ人はアフリカからセルトリユスを呼び寄せた。だが、彼らが共和制にあったとも、王政にあったとも歴史は伝えていない。従って彼らに女王を推戴させるに支障をきたすものは何もない。そして、女王をヴィリアツスより高貴な血筋から出生させることはできなかったので、ヒスパニアがローマ人と対抗した最大の偉人、セルトリユスがやって来る前に、各地でローマ人に対抗した最後のヒスパニア人の名を女王に与えた。ヴィリアツスは実は王ではなかった。でも、その権威のすべてを持っていた。ローマが彼を倒すために送った奉行や執政官はしばしば敗北を喫し、彼と和睦を結ぶほどあたかも君主や天晴れな敵に対する如く信頼を置いた。彼の死は⁽¹⁾私が扱っている時代の六十八年前に起こった。従って、彼は私が舞台に立たせた女王の祖父が曾祖父に当たるだろう。先に引用したヒスパニアの司教の言を信用して錯誤に陥ってしまったのだが、彼は私が女王に言わせたようにブルツスにではなく執政官セルウィリウスに滅ぼされた。この誤りはこれについて語っている唯一の詩句の一語を変えることでたやすく直せる。次のように修復すればよい。

セルウィリウスの優勢な運勢 v.439⁽²⁾

この詩で多く登場したシルラがセルトリユスより六年前に死んだことは承知している。しかし、それを厳密に取るなら時の単一を守るために時間を圧縮することが許容される。そして形式的に不可能でないならば、六年間で起こったことを六日間、あるいは六時間でなす事ができる。上のことを念頭に置くなら、私がここで述べたことにいささかも抵触することなくシルラがセルトリユスの前に死んだことを妨げるものはない。なぜならアルカスがシルラが独裁を放棄した知らせを伝えるためにローマを出発した後、シルラが死んだかもしれないからである。セルトリユスが暗殺されたのと同時にシルラは

独裁を辞したのである。更に加えるならば、時の順序について細心の注意を払わなければならないとしても、登場人物がよく知られており、解決すべき利害をともに持っている場合には、彼らの生涯の長短についてそんなに精密に捕らわれる必要はないということである。シルラはセルトリウスが殺されたときには既に死んでいた。しかし、シルラは奇跡に頼らず生きていることもできる。そして、観客は通常歴史の表面を生かじりしているだけであるから、真実らしさを越えないこうした延長に立腹することは稀である。とはいえ、私はこの気儘さを何の区別をつけることなく一般的な規則にしたいわけではない。シルラの死はヒスパニアのセルトリウスの事件に殆ど影響を及ぼさなかった。そしてセルトリウスにとって殆ど重要性がなかったのでブリュタルクでこの英雄の伝記を読みながら、他の資料から教えられなければ、二人のいずれが先に死んだのか決めることは困難である。ポンペの事柄のように、国々を覆したり、党派を破壊したり、事件に別の側面を与えたりすることは、別問題である。もし厚顔にもセザルの事件の後にポンペの事件を延ばしたりしたら、観客すべての反逆を著作者は受けることになる。加えて、ポンペと他のローマの首領達とセルトリウスの間で続いた戦争にいささか色合いをつけ説明する必要があった。なぜなら、国家がその潜主の自発的な辞任と死によって回復されたように見えた後、何故戦闘が執拗に続いたのか理解するのが困難だからである。疑いなくシルラがローマに生き返らせた絶対君主の精神は彼とともに死にはしなかった。ポンペと多くの者たちは内にその地位を奪回しようとして、セルトリウスが彼らの強力な障碍になることを恐れていた。ひとつにはセルトリウスが祖国に持つ変わらぬ愛から、ひとつには彼の高い名声、そして国家の大変動が支配者の消失という無秩序をもたらした場合、彼の功績がセルトリウスに優先権を与える可能性があるからである。

おそらくこれが戦争の真の動機だろうが、若くして頭角を現して以来直ちに種蒔かれた野心に由来する見えざる嫉妬心の蠢動の故にポンペを貶めないために、不正行為をシルラの暴力的支配に帰するために彼の寿命を延ばす方が得策と考えた。このことは更にポンペにアリストティに向けさせた強い愛の効果を抑止させるに役立った。シルラについて恐るべきことが何もなかったら、アリストティとの再婚を防ぎようはなかっただろう。シルラの憎らしい高い名声はこの悲劇全体の核心をなす政治的な議論に重みをつ

けているのである。

この同じポンペはセルトリウスの約束を信じて敵方の首領が全権を握っている城砦に会談をしに来たとき、将軍として軽率の誇りを免れないように見える。しかし、これは貴族と貴族、ローマ人とローマ人の間に成立する信頼であり、かくも偉大な人間の側に何らかの騙し合いなどあり得ないという一種の確信をポンペに与えているのである。私は批評家にポンペは自身の安全に十分な配慮を配らなかつたと言わせようとするのではない。彼にこうしたお忍びをさせなければ場所の単一を守ることが不可能だったのであり、お忍びをさせた私よりも規則の不都合さに帰すべきである。もし諸君がポンペの妻に持っていた意図を知らないの、未だ情熱を注いでいた妻に会いたいという熱意と、妻が他の夫を選ぶのではないかという不安から、ポンペの行動を理解しようとしないのであれば、人々がこの会談に覚えた喜び、宮内内の生まれからも才能からも第一級の人々が作品全体と同様賞賛したことから非難を免除させて頂けるだろう。諸君は何らアリストテレスに否認されるわけではない、彼はそれらが好んで受け入れられそうであり、詩が得られる利益がその優雅に匹敵すると期待できるなら、理なきことがらを時には舞台にあげることを甘受したのである。

登場人物

セルトリウス、ヒスパニアにおけるマリウス党の将軍

ペルペンナ、セルトリウスの副官

オフイド、セルトリウス軍の弁論家

ポンペ、シルラ党の将軍

アリストティ、ポンペの妻

ヴィリアト、リュジタニ⁽³⁾（現在はポルトガル）の女王

タミル、ヴィリアトのお付きの女官

セルスス、ポンペ党の弁論家

アルカス、アリストティの兄弟であるアリストティウスの解放奴隷

舞台はセルトリウスに征服されたアラゴンの都市、ネルトブリジ。今はカラタユ⁽⁴⁾。

第一幕

第一場

ペルペンナ、オフィド

ペルペンナ

なんなのだ、この胸騒ぎは！我が願いがこんなに叶わないのは、どんな因縁があつてなのか？本意に逆らつてもなそうとする裏切りは、その戦慄によってあらゆる望みを断ち切り、道理に刃向かう。罪悪で得られる地位についての喜ばしい夢はわしの快樂だった。だが、身の毛のよだつ光景を思うと、いざ実行というとき、我が輩の腕は麻痺れるのだ。無駄なことだ、我が勇猛心を鼓舞する野心なぞ、汚れた行為を名誉という空々しい輝きで飾るに過ぎない。詮無いことだった、卑劣な業に身を落とすために、あまたの後悔という枷を我が心から投げ捨てようとしたのだが。この心という奴は、自ら突然粉々に砕け散つても、後悔心をなんとか繋ぎ止めている鎖をとり戻すものなのだ。こうして、セルトリウスは運よく、奴の心臓を突き刺そうとしていた腕を止めてしまうのだ。

オフィド

殿の野心の成就を邪魔するのは、お心に巣くうどんな取るに足りない細心きわまりない邪魔者なのでしょうか？最高の地位を望む限り、少しのけちな血を流すに躊躇うことがありましようか？かの偉大な格言をお忘れになられましたか？『内乱を支配するものは罪だ。』罪が臆面もなく跋扈跳梁するところでは、小心な潔白など侮蔑すべきものでしかありません。名誉も美德も笑うべき名前に過ぎない。マリウス⁽⁵⁾もカルボンも細心さなど持ち合わせていなかった。シルラも又そう……

ペルペンナ

シルラもマリウスも決して犠牲者の血を惜しみはしなかった。狂気に走つた奴らが勝利に酔いしれるごとに、奴らは蛮行を恣にした。数々の虐殺、追放⁽⁶⁾がローマを葛藤、対立の渦に投げ込んだ。だが、血で染まった対立は支配者を生み出した。殺しはやりたい放題だったが、裏切りはなかったのだ。奴らの極めつきの狂気の沙汰といえども、同じ党派の人間の血を流すまでには至らなかつた。どちらの党派にしても、その地位に取つて代わるために、敢えて主君を殺す者はいなかった。

オフィド

では、断念するということですか、殿より力量の小さい首領の旗印の下に甘んじるとは！屈服せねばならないならば、もう戦争は止めましょう。大地すべてが従順につけている首枷を我らもつけましょう。何故、多くの危険を？何故、多くの戦いを。我々が平伏しようとするなら、シルラは講和を持ちかけてくるだろう。一人の人間に支配されるのはローマ人として面目ないことだ。だが、潜主には潜主を対抗させよう。ローマで生きるに優ることはない。

ペルペンナ

君は言つてることが一体分かつているのか？少なくとも、ここには自由がある。ローマで抹殺された我らが共和制のもっとも貴重なものがここには咲いている。この避難所には著名な追放者が難を逃れ、元老院の主立った逃散した議員が集まっている。その者どもによってセルトリウスはこの地方を治め、貢ぎ物を課し、領主達に権力を揮い、我らローマ人の残党を独立不羈な者に保っているのだ。しかし、どんな党も命令を下す者が必要であるし、至る所でセルトリウスに付きまとう思わぬ幸運、将軍がヒスパニアの民衆で得た名声……

オフィド

幸運から得たその名声が殿の昇進を妨げ、我々から名誉を奪っている。殿の軍が将軍の軍に合流した日の記憶がどんなに薄れようとも、殿の忸怩たる思いは消えないだろう。

ペルペンナ

ひりひりする過去をほじくり回さないでくれ。指揮権は当然予のものであった。力においても序列においても、あれに勝っていたのだから。それがしがいなくては、奴はその弱さから倒されていただろう。ところがだ、奴が姿を見せると忽ちの内に我が陣営の者達は奴のところ走り去つたのだ。予の兵士が予の幟を持ち去り奴の壕に走り行く始末だ。この恥辱を晴らそうと、わしも憤激に我を忘れ連中の後を追い、同じく奴の旗幟のもとに入ってしまった。それ以来、苦々しい嫉妬の情は密かに我が心を蝕んで離さず、抉るような痛みは日増しにある感情の影響の下で募るばかりなのだ。その感情とは野心より一層強く心を振り回すものだ。予はヴィリアトを神のごとく愛している。リュジタニア人の女王、名の聞こえた支配者は予との結婚によって、奴に奪われたわしの部下に揮っていた最高

の権力を女王の部下の上に取り戻してくれるだろう。ところが、何たることだ！女王自らが、(かの名声に惑わされて)、奴の名望がたてる麗しい評判に愛着しているのだ。女王の魅力には一瞥もくれないで、奴は自ら求めもしない愛情を予から盗んでいるのだ。それがしにことごとく逆らう奴の運勢とはこんなにも勝手放題なのだ。そして、わしのお宝を取り上げる度に、奴の名聞が一切をとりはからい、奴はなに知らぬ顔で済ますのだ。奴は愛することができし、恋の炎を密かに燃やしている。だが、この点についてはわしの胸の内をあれに打ち明けようと思う。手に入れた王冠さえ譲ってくれるなら、わしは憎しみを捨て去り、欲求がかなえられたなら満足するだろう。そして、我々の配慮によって組織され、我々の手で教育され、我々の規律の下でローマ人になった蛮族の間で同等の地位を保証してくれるならもう奪われた地位に恋々とする事もないだろう。

オフィド

こんな重大な謀り事をしているとき、愛だの恋だのと言っていられますか？愛の成り行きが殿にとって、それほど甘美であるなら、ヴィリアトは、セルトリユスが死んでも、殿のものになりますまい。

ペルペンナ

その通り、だが、その死後が気懸かりなのだ。セルトリユスの地位と同様に幸運まで手に入れられようか？奴を信任し支持した者達は、果たして奴同様に予に従ってくれようか？そして、凶らずも途切れた命の復讐にポンペの傘下に馳せ参じはしないだろうか？

オフィド

それは気を病み過ぎるというもの、それに、遅すぎる。今夜の宴会で將軍の命を断つことを決めた。和平のため軍は地方に散らばっている。そして、殿は我らの同志に命令権を有している。こんな陰謀にあつて絶好の機会が訪れている。だが、これほどの優勢な状況は明日には終わる。殿がこの襲撃を止めるつもりなら、一切の痕跡を残さないようご注意ください。セルトリユスを滅ぼすか、さもなくば同志を滅ぼすか。恐るべきものを怖れなさい。殿のように後悔の念に駆られている者が我らの中にもいるかも知れない。殿が引き延ばしたら、... おや、潜主が見えられた。殿を虜にした美女を奪い返しなさい。こちらとしては、この会見で殿がなにも得られな

いほど幸運なことを神に願おう。

第二場

セルトリユス、ペルペンナ

セルトリユス

今し方わしに不意打ちを喰らわせた知らせを聞きたまえ。間もなくポンペが当地にやって来るといふのだ。我々の仲違いについて私と話したいといふのだ。身の安全については、私の言葉だけを信用している。

ペルペンナ

大物の間では言葉だけで十分。殿の様なお方の約束はあまたの人質に匹敵します。それに驚きはしませんが、それにしても、怪訝なのはポンペが、この会談で中立の立場を取ろうともせず、殿に従いながらも、大殿という呼び名を称していることです。それは、偉人シルラの名声をあまりに値切ることと言わねばなりません。

セルトリユス

我々より勢力があると言っても、ヒスパニアに於いてではない。ここでは、かの殿の軍を敗北せしめ、あぶなかしい状態に逼塞せしめている。かの大殿は心の痛手に苦しみながら、一つか、二つの領土に甘んじている有様だ。自分の運勢にうんざりとして、春が来て和平が終わるや、予が兵を動かすことを怖れている。わしが始終良い成り行きに恵まれているのは、そなたとわしの連合のお陰だ。わしの力はそなたに負っている。わしの感謝の念を期待したまえ。ポンペに戻ろう。どんな動機からかの殿がここまで、我々の所に来られることになったのか知りたい。かの殿は我々と共に大した榮譽を分け持てないのだし、攻撃に打つてでも、守りにつくのも難儀なのだから、有利・不利に関わらず講和を結ぶことでかの名声を曇らす役を降りたいだろうし、その上ミトリダトとの戦が上首尾に行くかもしれないという期待もあろう。大殿はローマにいることを熱望しているのだ。殿の仕える主人から秩序と権力を受け取るために。

ペルペンナ

ポンペ殿が主人に強いられて追放し、ここに難を避けて来たアリストティがその消えやらぬ愛のほてりから、他の口実をつけて別れの挨拶をするために、ポンペ殿をここに呼び寄せたものとばかり思っておりました。殿の親しい潜主は、

殿にアリスティと暇乞いすることさえ許さなかつたほど邪悪なのですから。

セルトリユス

そうかも知れない。二人の間柄は睦まじいものだった。だが、ポンペはここに来て、意外な変わり様に出会うかもしれない。アリスティはあまりの侮辱に我慢がならず、愛は憎しみに変わり果て、我らの所に避難を求めるといふよりも、一層栄えある伴侶を探している様子。ご本人がそうも語ったし、それに、ローマにまだ残っている大物達の援助を仲介しようと申し出ました。その中には、奥方の親戚や仲間も含まれていた。そして、わしが奥方と結婚するなら、一切をわしのために差し出すというのだ。奥方がわしに渡した連中の手紙がそう約束している。わしはどうするのがいいのか、ゆっくりと考えてくれ。貴公の判断に委ねたいものだ。

ペルペンナ

あ々！これは、これは、殿。一瞬とも躊躇っていられましようか？アリスティとの婚姻に拷問のような隠れた強い嫌悪がなければ、ローマを持参金に提供するというのですから、いささかもあれこれと迷うときではありません。

セルトリユス

ペルペンナ、打ち明けなければならぬ。わしが怖れていること、考えていることについて。わしには別に愛する人が居るのだ。予の年で、恋の擒になるとはあまりの不面目、だから予を魅了した女人にも隠してきた。ところが、こういうわしにでも、愛する女人はいるものだ。いや、もっとはっきりと言おう、ヴィリアト女王が予との婚姻を望んでいる。女王の野心からなる婚姻が女王の民と我々を結合する手始めになり、続いてたくさんの結婚が競うようになされ、お互いに結ばれあった我らの二つの民は血も利益もしっかりと混ざり合って、二つの民族から一つの国が産まれるという算段なのだ。この地で、我らの大なる計画を支援するために部下の財産も血も惜しむことなく、変わらず我らに仕えた当然の報いとして女王は要求するのだ。女王が私に言ったというのではない、誰かが女王の代わりに代弁したのでもない。ただ、毎日のように、その確かな徴を認めるのだ。女王の考えがわしに疑いないものになった以上、わしがそうしたいと思う限りでしか知らぬ振りはできない。だから、アリスティを娶ったら、女王を怒らせ、そしてその優秀な部下達が主人が蔑ろ

にされた復讐として、女王の憤怒を晴らすために、その刃を我等に執念深く向けてきはしないだろうか。我等に取り返せない不利な情勢になることに較べれば、アリスティが約束したもののなぞもの数ではない。状況を打開しようという欲に眩んで、その支援にすがらば、我等は却って弱体化するだろう。

あそこに我が心を揺り動かして止まない者が見えた。予はアリスティを少しも嫌ってはいない。女王がわしの心をこんなにも支配していなければ、お互いの幸福のためにはどんなことでもしただろう。

ペルペンナ

殿の心痛である恐れを思えば、一刻も婚姻を遅らすべきではありませんまい。ヴィリアトは確かに驚きあわてふためくでしょう。だが、憤りも力がなければ何になるでしょう？女王の嫉妬、その空しい恫喝にもかかわらず、殿はやはりこの地方を支配されておられるではありませんか？女王の部下がいかにか激昂したといえども殿の軍まで指揮できましようか？連中のもっとも高貴な者達、又最も勇敢な者達の子息を殿はオスカ⁽⁷⁾に人質として捕らえているではありませんか？連中に命令するのはすべてローマ人であり、兵卒の中にはこの地の者も混じってはおりますが、歴戦に揉まれて連中とローマ人には結びつきが生まれ、連中さえローマの規律を愛し他のものを望まないほどなのです。一体、何故かくも連中を恐れるのでしょうか？何故、拒むなどと...？

セルトリユス

貴公こそ、何故そんなにしらを切るのかね？君がヴィリアトを愛してるという噂を聞いた。君の愛は理性の中に籠もってはいるが、輝き出ている。理屈の論議は無用だ。言い給え、女王を愛していると。わしはもう愛してはいない。話したらよからう。わしは貴公に多くの義理があるのだから、感謝の念からも一瞬たりとも貴公の愛を疑うなど恥と言っている。

ペルペンナ

殿が我が心から引き出そうとしている告白ほど優美なものはなく、そこで敢えて...

セルトリユス

それで十分、わしが貴公に代わって話そう。

ペルペンナ

いや！殿、それは余りのご沙汰．．．その上、

セルトリユス⁽⁸⁾

問答無用。

わしの恋の願いは既にアリストティに向いている。かのお方と結婚しよう、女王が同じ日に、君の恋に報いる気があるならばの話だが。というのは、貴公がどう言おうと、女王の憎しみを買ってはならない。このことがあるからこそ、かの名うてのローマのご婦人を避けていたのだ。アリストティが見えられた。奥方の心に向かわせるようわしのやりたいようにさせてくれ。その間、貴公は手紙を読んでいるがよい。

第三場

セルトリユス、アリストティ

アリストティ

どうかご立腹なさらないうで下さい。苦境に立たされ、非力なために殿にうるさくまとわりついているのですから。私の結婚についてではなく、その後の成り行きについて再三考える必要があるのです。新たな困難が出現してもまたも援助の手を私の願いに応じて差し伸べることが殿にはお出来になります。かつては私の夫であった不実な者が殿との会見のためにこの城塞にまでやって来るそうです。かの潜主の命令と夫の定まらない恋は、私がここに難を避けて守った誉れを奪い去ろうとしています。一方は成り行きを見越し、もう一方は密会が明るみになることを憂慮している始末。そして、二人ともそろって私の逃亡を非難するのに政治上の理屈をこねくり回すのです。夫が余所では心痛なくして見るに忍びないものを、力尽くで、あるいは一途な懇願に頼って再び手に入れようとするなら、どうか少しの不安もなく私をお守りくださるようお願い申し上げます。

セルトリユス

奥方、かの殿にはそれだけの理由がありました。不本意に別れさせられたからこそ、この美貌はますますその真価を発揮するというもの。仮にもそなたが敵意を持つ者に出会ったとしても、ここでは誰に対しても安心していられる。あれほど優しいところを見せた不実者にしても、そなたと話すたん、そなたの前に屈するでしょう。熱愛した者を憎むことは難しいこと、消し炭ほど直ちに燃えあがるものです。

アリストティ

あの裏切り者は、エミリの利益のために、私と別れ私をイタリア中の笑い者にしたのです。私の心がどれほど傷ついたかご承知でしょう。でも、夫が無理矢理に強いた侮辱を取り消し、エミリを追い払い、私を元の地位に戻すならば、それでも赦さないという訳ではありません。私が自由に夫に忠実でいられる限り、夫が一切を私に返すなら、私のすべては夫のものなのです。

セルトリユス

それでは、空しかった、わしがあらぬ空想にひたつたのは、空しかった、わしが思いきって、奥方、そなたの心の分け前に幾分かでも我が想いを託そうとしたのは。ポンペは今なおそなたの心を支配しているたった一人の間人だ。どれほど憤りに動かされても、そなたが他の男に差し出すのはただの婚姻の結びつきに過ぎない。ポンペの拒絶によって、予に求婚の些少の権利が生まれようと、かの殿のものであるそなたの胸中は決して他の者のものにはならない。

アリストティ

自分の義務を知り、しかも私との結婚が殿の力を増すとしたら、私の心情がなんだと言うのです？我が潜主に挑戦し、私の運命を高めるのに尽力するよりも、私の心から愛の甘く優しいいちゃつきを求めの方をお好みになるほど品くだつてはまさかおりますまい。うっちゃっておくのです、殿、愛だ恋だという艶話は小心な連中に委せましょう。我々が同盟するのは、ローマが間もなく失うことになる自由をより一層強く支えるために過ぎないのです。殿の政略に私の復讐も加えて、国家が陥っている苦難から救い出すのです。結婚とはただこうした遠大な計画を達成するためのものです。私の計画が大げさなことは承知しています。潜主が私に命じた過酷な逃亡生活にあっても、ポンペのお払い箱にはまだ何かしら価値があるのです。私の考えはとて貴く、とて誇らかなので最も偉大なローマ人でなければ相応しくないのです。

セルトリユス

その呼び名はそれがしにはふさわしくない、それがしは．．．

アリストティ

殿のなされたことが、殿がどんな方かを世界中に知らしめたのです。たとえこの呼び名が殿には過ぎたものに見えようと、少なくとも私の

不貞な夫は一段下の者です。あれはシルラの党に仕え、殿は自分の党を指揮しておられます。あなたは一方の旗頭であり、かなたは他方の臣下です。そして、私との誓いを破った離婚によって、なおのこと私以上にシルラによって抑えつけられているのです。大殿との結婚によって私が最高の地位に昇るのに対して、エミリとの結婚はあれを奴隷の地位に落とすのです。殿、失礼にも取り乱しました。あまりの幸運の余り、殿とのお話に不覚にも熱が入りました。私の幸運はまだ不確かなものです。ただ不安に憑かれながら運の開けるのを願っているのです。大殿が私の願いを聞き届けて下さるまでは、あまりに高い要求をしたことを始終苦にするでしょう。殿の一言によって私は安堵するか、窮するのです。

セルトリウス

奥方、つまりは、あなたを心安らかにさせることが請け合えましょうか？奥方のお話を聞いても、奥方が何を求めてられるのかははっきりとしないのですから。あなたとの華麗な婚姻がもたらす利益については承知しています。身の保障のためにも名声ある人物は尊重しております。彼らの助けによって我らの力は増し、じきに潜主制を倒してしまうでしょう。しかし、このような期待も裏切りの目に遭う、それはポンペがそなたのこころをがっちり握っているからであり、ここで広げられた大なる利益も、それがしにすべてを約束はすれ、何一つ与えないものに過ぎないからです。

アリストイ

私という人間それ自身を選んだから結婚しようとなさるなら、申しあげましょう。『どうか、そうなさいます。ポンペが何を望もうと、もう遅すぎます』。ただこの結婚には愛は入っておらず、政治の大義の純然たる結果であるのですから、百万の兵を持参金としたとしても、結婚がなくとももっと多くのものを殿に進呈しただろうと釈明するのをお忍び頂きとうございます。

私がポンペに無理にエミリを追い払わせても、シルラの支配しているイタリアに向かって進軍できるでしょうか？そのもっともな怒りに身を任せられるでしょうか？到底できもしないことです。私がポンペの心を捕らえている限り、ポンペは殿の所へ来るしかないので。こうした次第で、私との結婚によって殿はあまたの真のローマ人を味方にして万全の安泰を手に入れましょう。しかし、私が婚姻の繋がりを断ち切つ

てポンペに我が愛を返すのなら、この新たな離婚によってこうしたローマ人たち、さらにポンペ、その友人たち、潜主の主力をなす軍隊、少なくとも最も勇敢な兵士たちが彼らの將軍の後を追うことでしょう。あなた方は共通の旗印のもとにローマに進軍するでしょう。その時こそ、シルラよ、おまえは私を恐れ、震えるだろう、おまえが私から剥奪したものを私がおまえから奪い取れるならすぐにおまえの高慢な鼻がへし折れるのを目にするだろう。ポンペをそなたの妻の媚にするために、あれに偽りを言わせ、くだらない人間、恥知らずにしてしまった。でも、夫が私のためにその心に幾分かの余地を残しておいたら、夫は誓い、勇気、名誉を取り戻し、おまえの束縛を解いて私の懐に戻ってくる。そして、我々共通の憎しみのもとにおまえを滅ぼす。殿、大切な時間を無駄遣いしました。殿の利害はこれまで述べた通りです。どちらを選ぶか、殿次第です。殿の愛が待ちきれずにその少ない収穫で満足しようとするなら、もう一度申しあげましょう。私はすぐにでも結婚する準備が出来ていると。殿のお考えに任せます。なかなずく、お忘れにならないでください。私の名誉の故に、ここでは夫が必要なのです。いつ交換されるかもしれない戦争の戦利品に身を落とすことは耐えられないのです。そして、私の身分・地位から相手の方は偉大な人でなければなりません。大殿とポンペのほかには私にふさわしい方はいないので。

セルトリウス

殿にお会いなさり、その考えを伺えばよい。

アリストイ

お暇します、殿。私はここで一番利害の的となっており。私の余力の限りを尽くして、用意しに行きましょう。

セルトリウス⁽⁹⁾

わしは、ポンペ殿を丁寧を迎えるよう命令を与えよう。神々よ、私の考えを打ち明けるのを忍び給え。政略のために愛するとは残酷な運命だ。心はここにはないのに、利害の故に結婚するとは、かの奥方の利害くらい変わった不幸もないものだ。

第二幕

第一場

ヴィリアト、タミル

ヴィリアト

タミル、話さねばなりません。事態が迫っているのですから。ローマはこの城壁にまで私の主人となる女人を送ってきました。アリストイは亡命生活の苦しみのあげく、私に勝ろうとしています。私の心の内を明かすために、私の妙な目つきにあらん限りものを言わせても無駄でした。当地の王たちの求愛を抛って、お一人だけを選んだという自尊心に訴えても甲斐はありませんでした。私が胸の内を知らせようとしているただ一人の殿方は、敢えて知らぬ振りを装っているのか、全く気がつかないのか、もうこれ以上詮索するのは私の廉恥心が許しませんし、むしろ拒まれていと取った方が私の自尊心は満足するのです。その恥を雪いでもらいたい。あの方に言って頂きたいのです。あの愛すべき英雄に...そなたはかの殿をよく知っている。私の王座はどうすれば強い支えを得られるか、当地の王の求愛を退けているのは、かの方以外一体誰のためか？ヴィリアトにふさわしいのはセルトリュス一人しかおりません。あの方は私の限らない愛を注ぐに値する方です。殿と結婚して私の王座を強固にすると言う栄えある意図を、殿に伝えなさい。でも、そなたの練達したやり口に教えを垂れるのは間違っているかもしれません。そなたが熱心に王女に仕えているのを承知しているのですから。

タミル

女王、かの英雄にあってはすべてが輝やしく偉大です。しかし、素直に申し上げれば、あなた様の愛には驚かされました。あの年頃の殿方が若い方にこれほど強い魅力を及ぼし、黄色い皺の寄った額が五感を魅了する秘密を隠していたとはとても意外と申さねばなりません。

ヴィリアト

私の愛が重んじるのは感覚ではないのだよ。感情の血気にはやる騒々しさを厭い、我が偉大さに奉仕する恋は罅を越えた熱意を軽んじる。私がセルトリュスに見出すのは全土を敵に回しても一人の追放者を護るような戦争の秀でた術であり、月桂樹に覆われた頭、恐れなき勇者をも震撼させる風貌、勝利を分け持つ武勇なのです。勇気を愛する者は年齢に目を遣らず、優れた特徴は必ず眩い魔力を持っており、一切をなせる人は、どの歳にあって愛するに値するのです。

タミル

でも、この地方の王達、その求愛があなた様を苛立てておりますが、その殿方には勇氣も力も秀でたところもないのでしょうか？あなたの党には赫々たる武勲によって名声を上げた方が一人もおりませんのでしょうか？テウルドゥタン⁽¹⁰⁾の戦士、セルティベル⁽¹¹⁾の戦士は、ご先祖の王杖を守るにたいした頼りにならなかったのでしょうか？

ヴィリアト

あのような王に対抗するには、当地の王達の支援があれば十分です。でも、ローマ人に対抗するには、私の配下の王達では無力なのです。ローマに抵抗するには、今やローマしかないようです。ローマに挑むために、ローマは一人の殿方を遣わしました。この地方のために戦われるかの殿が運命の行方を握っており、神々と誼みを通じているのです。殿のご厚誼によって我らの領土が護られ、また、領主達に誉れが分け与えられて以来、このような絶大な支援と比べては、我らの王達も同盟者という名目を持った単なる家臣に過ぎなくなってしまいました。そして、この束縛を解こうとしたことが益々その軛を強く頑なにしたのです。

マンドニウスはどうなりました、そして、インディビリス⁽¹²⁾は？ともどもの王位をなお一層貶め、たった一度の負け戦で権力と栄光で鼻高かったのがへし折られたではありませんか？私が生を受けた大なるヴィリアツスもより幸運ではあったといえ、似たような不運に出会いました。三人の指揮官を倒し、十の戦に勝ち、百以上の砦の襲撃も撃退した。でも、この驚くべき幸運も、執政官ブリュツスの優勢な運命の前に突如雲散霧消した。かの大王は敗れ、命を落とした。そして、もし捕らわれの人々を解放するためにローマがかの貴人を追放してよこさなかったならばその王位はいつまでも屈辱にまみれたままだったでしょうに。

我らの運命が殿の勇氣に委ねられ、幸運がいつも我が軍を訪れるようになり、十年に及ぶ戦争はこの領土を専制君主の侵攻から安泰なものとした。十年経った今は、我々を覆うのはピレネの山の影くらいしか残されていない。我らの王達は、あの英雄がいなかったならば、互いに嫉妬しあいことの申し分ない成り行きを絶えず妨害したろう。あの連中は、仲間から支配者を選ぶことは決して出来ない。

タミル

とはいえ、ローマ人の支配に甘んじるのでしょうか？

ヴィリアト

殿は支配者という名称をとらない、領主達を対等に扱う。タミル、ともかく、殿は彼らの指揮官であり、領主達は殿の下で戦い、殿の命令の下で団結した。すべての王は名前だけで、実際はそうではないのだが、位がもたらす空しい誇りの故に実のない偽りの対等に甘んじている。

タミル

あなた様に有利な理屈を聞かされては、もう何も申し上げますまい。あなたと同様、殿の年齢に触れはしません。ただ、かの英雄は長年にわたってあまりにも勝ち続け、これから先勝利の期間は限られているように思えます。英雄が死ねば...

ヴィリアト

妬み深い神をうっちゃって、殿の輝かしい人生の光栄ある余生を享受しましょう。殿の死はその亡霊の眩しい輝きと高い名声によって私を守るでしょう。この二つの大きな支えに固められて、私の王位には恐れる敵はいないでしょう。それらはあまたの王のなす以上のことを私のためにするのです。このことについては、またの機会に話し合ひましょう。殿がやって来られました。

第二場

セルトリユス、ヴィリアト、タミル

セルトリユス

私が図らずも抱く大胆なもくろみを聞かれたら、なんと言われるのでしょうか？奥方の心中を覗き見ようとは、あなたの名誉を損なうのではありますまいか？

ヴィリアト

私の心は開け広げですので、どなたでも読めます。私の心中を知るには、私が言葉にするよりも、ただご覧なさるだけで多分十分でしょう。

セルトリユス

それにしても、もう少しよく事態を明かして欲しいものです。あなたの領主達はすべて競って、あなたとの結婚を求めています。我らの幸運は女王の親切心の賜物なのですから、そのご好意に縋って懇願する次第です。我々も関わる重大な婿選びにおいて、もし心変わりのしや

すい、忠節心の欠く、また我が党派の利害を熱心に守ろうとしない領主をお選びになったなら、お考えください。我々が将来どのような窮地に陥るか、私が今出来ることをなお長きにわたって出来るものかどうか、私の武勇もいつかは色褪せ...

ヴィリアト

殿は、私も驚くような心配をなさるのですね。私の領土すべては殿にしっかりと支配されました。私が夫を選ぶようなことがありましたら、夫がどんな目論見を立てるにせよ、殿に依存することになりましょう。しかし、そうした笑止な心配を払うために、殿ご自身がお選びになってはいかがでしょうか。素直にお話してください、この領主達すべての中で、誰が安心できる人物なのか、誰になら王という偉大な名をさずけられるのか？

セルトリユス

私は女王に気に入るような配偶者を選びたいものです。あなたが領主達と交際する際のよそよそしい態度を拝見しますと、どなたにもご関心がないようで...

ヴィリアト

それはおそらく、誰も私の気に入らないからでしょう。彼らの高い地位に相応した誇り高い華麗な装いも、偉大なローマ人が姿を見せた瞬間消え失せてしまうのです。

セルトリユス

それでは、配偶者としてローマ人を推薦したとすれば？

ヴィリアト

殿からの贈り物を拒めましょうか？

セルトリユス

今のお言葉に甘えて、古きローマの一員と認められるに値するローマ人を敢えて推薦致しましょう。かの殿は生まれもよく、勇気に溢れ、栄光に覆われ、多くの武勲を重ね、ヒスパニア全土から尊敬されております。物惜しみせず、勇猛果敢、愛想が良く、心は寛く、つまりはペルペンナ、奥方がかの殿に勝るのは...

ヴィリアト

こんなにも長所をあげては、てっきり殿の名前が出てくるものと思っておりました。殿が連

ねた輝かしい讃辞からは、もうこれ以上望むことは許されないことです。ただ、回りくどさにはいささか辟易しました。殿は女王をご自分の部下に与えようとなさるのです！ローマ人がこうして愛する人を選ぶのなら、最低の弁舌家にも王女が必要となりましょう。

セルトリユス

女王...

ヴィリアト

配偶者の選択について腹藏なく話しましょう。殿は私にはあまりに分の過ぎた方なのでしょう。私は殿には言うに足りないものなのでしょう。それは私を差し上げることで、差し上げるとは耳に痛い言葉です。でも、このような愛は私の部類には似つかわしいのです。そして、私が何をなすべきかよく承知していることを誰にも知って欲しいのです。私を理解して貰うために、それを高らかに言ひましょう。私はローマ人を受け入れました。もっともそのローマ人が支配するとしてです。また、支配するより服従することに長けていない限りは、我らの王達を侮るべきものとも思いません。彼らの力について殿と較べるとしたなら、彼らの弱点はともかく王という名称を持っていることです。従って、誰よりも殿を選んだ高慢な自尊心は、殿を別にして誰よりも力の劣る者を選ぶでしょう。なぜなら、私の出生の名誉を満たすには名も力も王でなければならぬでしょう。このような方がもういない限り、名はなくとも力がある、さもなくば力はなくとも名があるという方を選ぶのが自分の本分を果たすことだと考えたのです。

セルトリユス

奥方の出である名門の先祖に返すべきものを返そうとするその偉大な心構えには賞賛の念を禁じ得ません。その誇りがより卑小なものに落ちたならば、そなたに残されたものは何もなくなるでしょう。王の威厳を全うするために、奥方の高い生まれと連れ合う相手を求めているのですから、ペルペンナは我々の中ではただ一人の相手です。その血筋は輝かしい位にいささかの陰も落としません。殿は我らの王族の出であり、エトルリアの王族の出身でもあります。より低い出生の私としては、いささかの名声で自惚れ、我が恋心で王位を汚そうとは思いません。私を買いかぶる余り、ペルペンナを不当に扱うのはお止めください。私は女王の家臣の名を頂

きたいだけなのです。この栄えある名は私を歓びで満たし、女王に仕えようと思えばこそ、勝利を呼び込むのです。天が私に下された恵まらない生まれにもかかわらず...

ヴィリアト

そう言われるなら、もっと身を低く下さい。さもなくば、どうか、打ち明けてくださいませ、私を受け入れないのは何が殿を拘束しているのか、私を自由にご利用ください。わが王位が殿に払ってる敬意と我が身に加えられる侮りとを和合していただきたいのです。殿を尊んで止まないことを知りつつも、それを一層よく利用なさろうとしないのはどのような粉飾手管を凝らしても隠しようのないことです。もう私を侮辱するほど尊敬の極みにあげるのはお止めください。殿が望まれたのですから、私の家来におなり下さい。そして、私には女王としてそなたの願いを思いの儘にさせることです。そなたの熱い恋を私に向けなさい、私がそう望んでいるからです。あなたのペルペンナについては、その高貴な生まれにもかかわらず、そなたへの服従から抜け出られないでおりますが、たとえ、王とともに神々の血を引いていたとしても、我が伴侶となる榮譽を約束してはなりません。ローマは高貴さに威厳をおいておりません。あなたの偉大なマリウスは卑しい生まれでした。それでもローマ人が七回も主人と選んだただ一人の人間なのです。こうして、各々をその流儀に従って評するなら、ヒスパニアの血にさえ欠けることのない愛顧を与えましょう。あなた方ローマ人の間でも、生まれには大した注意を払っておりません。ローマでは勇気が高い地位を占めるのですから、殿、他のローマ人同様女王の名が嫌いなら、私をローマの女性と見なさない。我らに与えられた市民権は王冠を被った額にも同じく権利を持っています。この権利を与えられて、あなた方と同じ身となった私は、私の臣下の一人に十分匹敵すると思うのです。あるローマのご婦人が殿の拒否の原因だとすると、私はその方にいささかも劣らず、加えて女王なのです。たぶんあまりに知れわたった惨めさへの同情が...

セルトリユス

よくわかりました、女王、あなたに一切を明言するために、私は白状しよう、アリストイが...

ヴィリアト

アリスティは我々に一切を述べました。あの方が何を望んでいるか、あなたにどんな手紙を書き送ったか、無駄な時間はありません、殿のお考えをお聴かせください。

セルトリウス

あの方の関心は唯大義名分にあります。あなたと私とでは、ヒスパニアを潜主から解放する手だてが違っているのですから、どうか、共通の利益を探しましょう。勇気ある者は何をすべきかご判断ください。

アリスティの助けを拒むのは、女王、あなたとあなたの国々を裏切ることになりましょう。と言ってアリスティの申し込みを承諾するのは、奥方の差し出された婚姻の申し出を蔑し、我らの共通の画策を嫉む運命がこの大なる王国を悪しき手の中に投げ込むならば、その同じ助けが我らの滅亡になるかも知れないのです。奥方がリュジタニとこの強いローマの救援を合体していたならそれがしはシルラを亡き者とみなしただろう。ところが、奥方はとうとう配偶者に頼ることになった。それがしが奥方の保証として与えられるのはただペルペンナしかない。かの殿のしたことをご覧なさい、予は殿に大変な借りがある。殿の恋のため、もっともな願い...

ヴィリアト

殿があのお方にそれほど借りを持っているのに、われには何の借りもない、殿の借りを私の財であの方に払わねばならないのでしょうか？殿の軍を私の王冠で護って以来、殿の征服に私の加わる余地はなかったのでしょうか？殿のためにしたのは、いつまでも殿に仕えるため、私の助けを差し伸べたのは自分を囚われの身にするためだったのでしょうか？お間違えないよう。ペルペンナと結婚しても、私は最高の権力を手放したりはしません。ペルペンナを焚きつけて、殿を上官に留めてはおかないでしょう。さらに申せば、誰と結婚しようとも、私は王冠を誇らかに被るつもりです。我々が別れることになったら何もかも失うのではないかと思って、大殿のことを考えているのです。殿一人が、海から山々までヒスパニアを統一できるお方、私の提案は、そのただ一つ的手段なのです。かの親しき同郷の方が殿のために何をしたにせよ、潜主制に反対して殿の味方をしたにせよ、命長らえていることで十分に報われているはず。かの党派の敗北に打ちのめされて、もし殿と合流しなければかのお方は滅びていたでしょう。噂では、

かの殿の軍はかの方の意に反して、殿の軍に降ったというではありませんか。

ローマは絶大な支援を提供しようとしています。少なくとも、殿へ届けられた手紙によれば。でも、追放された人達を助けるためにです。我々が完全な勝利を得ようとしているときに、その榮譽を分かち合う必要がありますか？もう一度の戦役で、我らの騎兵隊は独力で、シルラの軍旗をピレネの向こうに押し返しましょう。それでいながら、最後にやってきた者が、ここに自分たちの帝国を築くのだと言おうとしている！このような名譽を与えるのはお互いに惜しもうではありませんか。何もかもできるときに、我ら以外に借りを作る必要はないのです...

セルトリウス

この上なく確かな見込みでも、力があり余るということはないのです。これ以上ない幸運も突如離れ去っては不意打ちを喰らわすことがあります。過大な信頼を裏切るのが運命は好きなのです。そして、遠大な計画では何一つおろそかにしてはなりません。天がローマ人と共々手にしようとしている名譽を他のローマ人と分け合うのは望まないからと言って、ローマの奴隷になる、我々を隷従の徒とする危険に曝してよいものでしょうか？我らが彼らの援助なく世界を解放したなら、むろん、我らの栄光は並び立つもののないものでしょう。しかしたくさんの勝利も何かの不運で無に帰したら、どんなに激しく身を責めねばならないでしょう？加えて、ご考慮頂きたい、ペルペンナはあなたを愛している、ペルペンナは王位に値する、あるいはそう思っている、ペルペンナはここで大層なことをやってのけた、最善の政治をやっても不満の徒は消えないのはいつの時代にも見られることです、奥方の無視に逆なでされて、ペルペンナがもしやして...

ヴィリアト

殿、はっきりと言いなさい。私は殿を主君としたのですから、私は自分の意見がどうあろうと、従わねばなりません。一切の理屈の行き着くところはそうなのです。私が服従に馴れるために、その大切な英雄をお入れなさい。もし殿がペルペンナを恐れているなら、あなたの助けを貸してしまったこともいつまでも空しく悔やむのではないかと少なくとも同じくらい心配することです。

セルトリュス

奥方のお考えでは、...

ヴィリアト

これだけ言えば殿には十分なはずです。私について言われていること、評判は分かっています。行きなさい、かの殿にお譲りなさい、推測なぞなさらぬよう。...

セルトリュス

私は他の人のために話してるのです、とはいえ、嗚呼、もし、奥方がご存じなら。...

ヴィリアト

殿、私が何を知らなければならないのですか？今の溜息はどんな秘密を隠しているのですか？

セルトリュス

溜息を二度も繰り返すなんて。...

ヴィリアト

止めないで、続けなさい、私は殿が思ってる以上に殿に従うつもりです。

第三場

ヴィリアト、タミル

タミル

殿の薄情なこと、私はとてもいたたまれません、奥方様。...

ヴィリアト

外見に騙されてはなりません、心の底では私を愛してるのですから。

タミル

まあ！それでは恋敵のために、よそよそしくなさっておられるとは。...

ヴィリアト

私に相手になって欲しいのです、それだけのことです。

タミル

奥方は物わかりがよすぎて、私には何のことやら。...

ヴィリアト

その恋敵と話しましょう、あそこに見えまし

た。

第四場

ヴィリアト、ペルペンナ、オフィド、タミル

ヴィリアト

ペルペンナ、私を愛しているとか、セルトリュスが言っておりました。その言葉を信じます。私のはかの殿に全幅の信頼を置いているのですから。ですから、あなたの愛を認めましょう。ただ私の鬱いだ気分を晴らしてください、殿が女王にふさわしい理由は何なのでしょう？どんな資格で女王の気に入り、どのような魔力が働いて、いつか殿の愛が王冠で報われることになるのでしょうか？

ペルペンナ

心の籠もった愛、欠かすことのないお仕え、深い尊敬の念、身を粉にしての献身、いくばくかの結果が私の愛を証拠づけるなら。...

ヴィリアト

よろしい、王冠に身を献げるおつもりで？

ペルペンナ

私の全ての心遣い、私の一切の血、私の情愛、私の命を。

ヴィリアト

嫉妬しながら、王冠に仕えるなどと出来ることでしょうか？

ペルペンナ

嫉妬などと、女王。...

ヴィリアト

嫉妬と聞いても殿の胸は平気でした。王冠は愛のものではなく、国家に属するものです。私は野心家であり、女王としての自尊心から、他の女主人が私の目前で私自身の王位に上がり私の国々で私の優位に就くのを見かねていられます。セルトリュスはここを支配し、我が国全土に法を布き、私もそれには従って参りました。悔やむことは何もありません。セルトリュスはよく支配しました、かの殿を嘉された天に感謝します。私が嫉妬しているものが何か打ち明けますと、それはセルトリュスの妻の傍らで私がどんな地位を保てるかと言うことなのです。アリストティはセルトリュスの妻となろうとし、あの方が提供なさるもの、あるいは人々が

アリスティのためにすることは、アリスティの成功を疑わないものにしております。この放浪人、逃亡しては行く先々の地方を混乱させる者から我らの地方を解き放ちなさい。目障りな名うての美女を他の地方の誉れとそつとなさい。たくさんの国が美貌の君を匿うでしょう。

ペルペンナ

女王がどんな命令を下されようと、私には造作のないこと。ただ、セルトリユスがアリスティを娶らないとしても、別の婚姻の可能性が奥方には同じく困惑の種になるのでは。つまりは同じことです、他の女人にせよ、アリスティにせよ。．．

ヴィリアト

止めましょう、ペルペンナ、この話は。今と、未来について準備をしましょう。状況に応じて、これには応じられるでしょう。時は偉大な師匠であり、それは多くのことを支配します。ともかく、私は嫉妬深く、あなたはその訳を言い当てました。私に仕えるおつもり？

ペルペンナ

つもりかですって？飛んで行きます。私の日々を捧げたくてたまらないのです。この取るに足りない奉公により私にいささかの好意ある眼差しが向けられ、こころが柔和に。．．

ヴィリアト

お止めなさい。殿は急な願いをあまりに遠くまで運びなされる。確かに、そう言うたぐいの奉公は私の喜びとなるものです。でも、どんな報いが与えられるかは、どうか私にお任せのほどを。私は恩知らずではありませんし、私がどれほどのものを負ったかもお知っております。これだけ言えば、初めてにしては十分です。失礼。

第五場

ペルペンナ、オフィド

オフィド

殿、担がれていることがお分かりになったでしょう。女王の心は全く別です。セルトリユスがそう言っていました。そして、殿の傍らで公然と恋敵を演じているのです。その間、女王は。．．

ペルペンナ

まあ、そう悪くとな。女王に奉仕する手段

を開いてくれたのだから、わしはもう嬉しさのあまりあらん限りのことをするつもりだ。

オフィド

すると殿は、あの嫉み深い心が殿の意に反するためにも、殿を利用しようとしていること、生まれ出た恋心を断ち切って、かの恋敵を再び自分のところに戻そうとしていることが、お分かりにならないのですか？

ペルペンナ

構うものか、女王に仕えようではないか、その愛に適うのだ。力と復讐心はお互いに作用しあうものだ。何日間かは、我らに有利な希望にかけようではないか、仮にその結果がまずくてもだ。

オフィド

だが、殿。．．

ペルペンナ

余計な話は慎もう。女王に仕えることを考えるのだ。もう議論はなしだ。ただ女王への奉仕だけがわしの心を占めている。城壁から、ポンペ一行が見える。そう言う知らせがあったのは知っていよう。迎えに行こう。セルトリユスがわしにこの務めを申し渡したのな。

第三幕

第一場

セルトリユス、ポンペ、供奉

セルトリユス

大殿、一体誰が休戦のお陰で私の栄光がこれほどまでに高まると思っただろうか？戦争は名声に多いな喝采をもたらすが、和平の内側でも大きく育つものだったのだ。実に、今でも我が目を疑っている。この城塞で偉大なポンペに出会えるとは、差し支えなければ、わしに身に過ぎた名誉を与えたのはどのような幸運なのか知りたいもので。

ポンペ

理由は二つある。ところで、殿、人払いを。遠慮なくものを言いたいので。

我らの党派の間にある敵愾心も、名誉の持つすべての権利を無にするわけではない。真の価値は最も激しい憎しみにも勝るものであるから、

美点は猛々しい敵からも尊敬の念を貢ぎ物として勝ち取る。それこそが槍も投げ槍も持たず、我が騎兵隊において無敵の軍を指図する怒れる眼差しを捨て置いて、これほど天下に聞こえた英雄にお近づきになりたいという熱意が、予がここであますことなく思い知った武勇に捧げようとするものなのです。

予は若く恐れを知らぬ武将だ。教え切れないほど勝利し、我が幸運は予の勇猛心を奮い立たせてしかるべきものだろう。だが、(率直な物言いは偉大な心にこそふさわしい) 余所で勝ち取った偉大な輝かしい勝利によって教えられた以上のことを、殿との戦いに敵わなかったことから予は学んだ。殿のされたこと、包囲、攻撃、時を得た撤退、巧みな野営、各々にその役を適切に割り当てることを目にして予は何をなさねばならないか肝に銘じた。殿の模範は熱意を持って取り入れれば予のためにもなる。殿を連れて国に帰れば、それはすばらしい贈り物となろう！予は喜んでローマに行けるだろう、休戦によって、その暇が出来たのだから。これほど重要な和平を結ぶほんのわずかな望みさえ持てたら！幸運⁽¹³⁾なシルラの側で、殿のために何も出来ないというのか？また、殿の傍らで、万人のために何もできないのだろうか？

セルトリユス

殿が真のローマ精神をお持ちならば、必ずや私のために難儀を省いて下されるでしょう。まず、この込み入った事柄に入る前に、殿の丁寧なご挨拶に答えることをお許し頂きたい。殿が最高の地位に昇っても得られないような高い敬意を払われても私には何ら加わるものはない。殿の若年の武勲が勝ち取った勝利、我らの法が許す年齢の以前に手にした凱旋、願いが許される以前に得た威儀、それを見れば世界が殿にどれほどの尊敬を払っているか知れよう。この際領土の安定、国土の優位にいささかでも力を用いようとするなら、私の経験もそのためには役に立つこともある。戦争の技術には時には年齢が必要だからだ。時は大した働きをする。私の行動から殿が何らかの教えを引き出そうとされるなら、私の例はいつか殿の例に譲るだろう。わしが殿に教えたことを、殿が他の人々に教えることになるのだ。将来、私が死んだとき、私の用に仕えていたものは殿から学ぶことになろう、殿が私からしたように。

幸運なシルラについては申すことは何もない。かの帝国を弱める方法は示した通り。山脈を渡るような教訓を付け加えることが出来るとすれ

ば、わしは殿の有名な退却を見習おう。奴と直接談判するために、チブル川⁽¹⁴⁾の岸で、短剣を持ってローマ人民のために奴と決闘する。

ポンペ

高踏な教訓は難しすぎます。また、殿には無用の労苦ともなりましょう。殿がそれを私に説明しようとされるなら、それをうまくやっつける技術まで教えて頂かなくては。

セルトリユス

だから、殿が正真正銘のローマ精神をお持ちなら、私の苦労を省くことが出来る。それは、すでに申し上げた。

ポンペ

同じ話を繰り返されるのは、独立不羈な精神には煩わしい。私としては、殿を尊敬するあまり、苦情を並べる話題からは断固として避けるよう強いられているのですから、込み入った話の意味をくみ取ろうとは思わない。

セルトリユス

このような模糊とした話を好まないことは承知です。お付きの者を払ったときそのように言われた。ところで、殿、我らしかいないのですから、それがしも遠慮なく言わせていただきたい。もしシルラがいなかった場合と同じ率直さを殿と分かち合いたい。

全土の支配者達を鉄鎖にかけようとする戦争の指導者を一体まったきローマ人と呼べましようか？この名は殿とシルラがいなかったならば、我らにふさわしいものであった。シルラのために、殿のために我らはローマ人の名を失った。殿こそ勇者達を軛にかけたのですぞ。王よりも秀でていたものが、今や奴隷にも劣る身。殿のあげた最高の手柄がもたらした栄光はかの者たちの大きな苦しみを増すばかり。彼らの逆境は殿の眩い手柄の結果なのだ。それでも、殿は真のローマ人と称するおつもりか？殿はこの名を先祖から受け継いだ。だが、その名が殿の誇りなら、その名に一層ふさわしい者となつてはどうか？

ポンペ

予は、いつの日か国家を立て直すことに全力を傾倒している限り十分その名にふさわしいと思っている。だが、殿は心を行為で判断されておられる。しばしば、双方は違うように見えるものだが。

二つの党派が国家を分裂しているとき、人は最善な方を、あるいは最悪な方をやみくもに選ぶものだ。ふとしたことあるいはやむない事情が、人をあちらこちらに追いたてる。正しい党派など知れないので、主人を選ぶのは我らの勝手気儘という次第だ。だが選んだ以上、もう抜けられない。予はマリウスの時代にシルラに仕えた。抗争を呼んだ凶運が少しでも続く限り、予はシルラに仕えるだろう。予にはかの殿の心中が読めないの、運のいいシルラがどんな策を練っているのか知らない。あまりにも行き過ぎることがあるなら、私さえ非難することもある。予は心を一体とすることなく、シルラに行動を貸している。予はかの幸運に身を委ねているが、我が願いは自由に向けられている。このことが予が地位に留まる理由なのだ。もし予がいなければ、その地位は不正と放恣に蹂躪されるだろう。シルラが死に、危険な権力が義務を知る連中の手に握られたら、その時予の目的は果たされ、殿も同様となる。

セルトリウス

しかし、それまでの間、殿は他人のように装って仕えることになる。我ら人間は一切を目に入る表面で判断するものだから、中身を見抜くのは神の業だ。我らは殿のやり方を心配しているのだ。ローマで一人の人間の支配に人民を馴れさせるのではなからうか、又、他人の権力の下でその人物のために活動するうち、殿の剛勇も空しくなるのではなからうか。

私は殿を尊敬しているから、殿が自由を栄光としていること、殿が密かに自由に願いを託していることを信じることはたやすい。だが、疑り深い精神で思い見れば、ローマ人が主人の支配を受け入れるよう力を貸してのではないかとも思えるのだ。いつかローマの支配者となれるかも知れないと言う希望に喜びを見出し、人民を圧迫し、殿もその一翼を担っている武力をもって、人民を輒に馴れさせようとしているのだ。人民が隷従の地位に甘んじるかどうか不安なので、シルラの陰に隠れて、ローマ人の動向を伺っているのではあるまいか？

ポンペ

そのような話の誤りは時が正すだろう。ところで、ここで目にするものは正当なのだろうか？ 今度は私が遠慮なく話すことをお認め頂きたい。殿の例が私には教訓にもなり、お許しにもなった。予も目に入ったことで判断し、内を見通すのは神に任せよう。当地でも一人の人間

の支配下に生きているのではなからうか？ 殿は、シルラがローマでしているように支配しているのではないか？ 独裁者という名であれ、將軍という名であれ、構わない、それらの権力が同じであれば名称が違うからと言って物事が変わるわけではない。殿はシルラと同じように、支配している。支配者に憎まれるのが危険だということなら、殿に従わないのも安全とは言えまい。

私としては、いつか殿のようなご身分になったら、殿のようにおそろく振る舞うことであろう。それまでは、...

セルトリウス

その時まで、疑いなさるがよい。そして、わしをシルラにぴったりと似せて貰いたくはない。わしがここで支配を揮っているのは、元老院の命令によるものだ。わしの命令によって殺された者はいない。わが敵は公共の福利の敵ばかりだ。わしは彼らに正当な戦争を仕掛け、一人たりとも追放していない。わしの最高の権力は、誰にも開かれた避難所なのだ。もしそれがしに従っているととしても、それはわしへの親しみがあある限りにおいてだ。

ポンペ

殿の支配はそれだけに一層危ういのですぞ。人民に殿の徳を慕わせ、隷従させつつも人気をとる秘密を心得ており、殿の鎖に繋がれながらも自発的に服従していると思いきや、そして、愛情によって支配する権力を倒そうとするばかりに、却って自由は遅々として日の目を見ないことになる。

疑い深き心はこう思うものです。このような不愉快な事柄を調べ回るのは止しましょう、又、殿の開かれた避難所に逃げてきた追放人の集まりが元老院と言えるのかどうかも詮索はしない。それから、もう一つ、私がローマに喜びを持って帰る手だてではないのでしょうか？ かくも偉大な人物を同郷の者に返すことが出来れば、その嬉しさは極めつきのものとならうものを。祖国の城壁を再見するくらい喜ばしいものはない。予の声を借りて殿に願っているもの、それはローマですぞ。

セルトリウス

貴公の主君の居るところ、その主君の乱心が国法となる所が？ 奴のなした追放で墓場に充ちた囲い場をもうローマなどと呼べはしない。それらの壁はかつては美しい運命が飾っていたが、今は牢獄の壁、更には墓場の壁に成り下がった。

余所で、創建期の力を持って生き返るために、ローマは偽のローマ人ときっぱりと手を切ったのだ。そして、それがしの周りに本当のローマ人の支えを得て、ローマはもはやローマにはあらず、予のいるところこそあるのだ。ともかく、お互い一致できることについて語ろう。名誉を持ってわれらに喜ばしい知らせを授けられる手段はただ一つしかない。我らが連合して、潜主を倒すことだ。ローマはこの画策に諸手をあげて賛同してくるだろう。こうして、祖国への愛を示そうではないか、祖国への愛は武勇の徒にあつては、偶像崇拜と言えるほど熱烈だ。そして、毎年貴公の腕と我が手が流すローマ人の血の洪水を儉約しようではないか。

ポンペ

その計画は、殿にとって栄光に輝くものだが、私には一片のこだわりもない行為とお思いですか？他では指揮を執る予が、殿に仕えられるでしょうか？

セルトリユス

それがしは指揮権に執る者ではない。それはわしが預かるだけとしよう。そして殿にお渡ししよう。何も私という人間が殿の臣下になろうというのではない。わしにはそうなるには高い誇りがある。ただ、この同盟で殿の副官という呼び方を頂ければよい。

ポンペ

そのような副官の頭は単に形だけの者に過ぎない。副官という名を持ちながら亡いはずの権威を保持しており、連中はただその影を譲ったに過ぎない。連中の気に入次第のことをするのが後をついて行くとか、服従することになるのだ。もっとよく、もっと確実なやり方がある。シルラは、殿が望めば、独裁を放棄する。もしこの地に敵が居ないことが分かっていたら、既に自身で独裁を辞していただろう。武器を降ろしなさい、結果は予が請け合う。シルラの約束を取りつけて、こう申しているのだ。殿がローマ人なら、この機会を逃してはならない。

セルトリユス

そうした錯覚に目眩まされたりはせぬ。わしは暴君という者をよく知っている、そのやり方もだ。潜主が何を約束しようと、その本性は変わらない。殿を無理矢理に味方にするまでは、奴は殿を不逞の輩と見なしていた。...

ポンペ

私には、その言葉は死ぬほどつらい。率直に言おう、それは私を悲しみにくれさせたただ一つの事柄だった。予はアリストティを愛していた。シルラは私からかの女性を奪い去った。自らを叱責しては、我が心は未だ震え戦っている。シルラは私にたくさんの失ったものについてしきりに思い起こさせる。私はアリストティのために、殿に感謝を捧げる。殿、その偉大な心の気配りのお陰で、アリストティは当地で名誉ある保護を忝なくしている。

セルトリユス

不遇にある勇氣ある人を堂々と護るのは、寛容な者にとって些細な務めに過ぎない。従って、更なることをするつもりだ。奥方に伴侶を与えたい。

ポンペ

伴侶ですって！おう、なんとということを目にしたのか？それで、誰と？殿。

セルトリユス

それがし、

ポンペ

貴殿が！

殿、アリストティの心はあげて幼少以来私のものだ。こんな薄情でもってシルラの真似をしてはならない。私の傷心はもういたたまれないほど大きい、加えて最愛の者が他人の腕に抱かれる苦痛を見るとは。

セルトリユス

すべてはまだ殿のものだ。お出でなさい、奥方、わしがそなたの心にどんな強権を揮ったかを見せるために、そして、できることなら、全人類にそなたがわしと結婚するために、そなたに無理強いをしたかを示すために。

ポンペ

アリストティ！ああ、天よ！

セルトリユス

殿を奥方と残そう。奥方の心は殿に未だ忠実である。殿のものをお取りなさい、でなければ、もう嘆くではない。殿が拒んだ故、わしが利を得るからといって。

第二場

ポンペ、アリスティ

ポンペ

今、耳にしたのは本当なのか、奥方？そんなことがあり得ようか。...

アリスティ

本当です、殿。私の心はとても感じやすいのです。私が愛されているか、憎まれているかによって、私の方も愛したり、憎んだりします。私の憎しみ、私の愛を決めるのは名誉なのです。でも、名誉が私の愛の女王だからといって、憎しみについては必ずしもそうではありません。私には憎しみを思うようにはできないのです。私も時に憎しみに捕らわれますが、願うほどでなく、憎むべき程度にも達しません。

ポンペ

私に対しては、その憎しみはこの上なく大きい。憐憫の情によって酌量されなかったし、寛大な心で和らげようともなさらなかった。

アリスティ

憎しみ続けるのがどんなにつらいか、あなたはお分かりにならないのね？私の愛は、ただ消えなければならないから消えています。我にもなくあなたの愛を求めて再び生まれようとしているのです。あなたを目の前にして、私の怒りは揺らめき躓き、勢いを失い、あなたと話すにつれて失われていきます。まだ、殿は私を愛していられるでしょうか？

ポンペ

そなたを愛してるかですって？私は生きているのか、私はポンペなのかとお尋ねください。そなたの愛は私の命であり、私の命はそなたのものです。

アリスティ

執念深い怨恨の情よ、怨恨が生んだ陰気な子供達よ、我が栄光の敵よ、陰鬱な恨みがましい感情よ、我が心より立ち去れ、もうおまえ達の言葉を信じはしないぞ。われにどれほどの侮辱を与えたとしても、もう覚えてはいない。再婚などない、セルトリウスもない、われは偉大なポンペのもの。ポンペがまだわれを愛しているのだから、ポンペがその心をわれに返してくれるのだから、再び、かの殿を愛する。もうセルトリウスはない。殿、お答えください、とうとう私に返された胸の内を語ってください。セル

トリウスはない。まあ、なんということでしょう！私が何を言おうと、殿は口を閉じたまま。エミリもいない。

我が心に戻ってこい、執念深い怨念よ、名誉が生む誇り高い子供達よ、尊い憤怒よ、汝らこそわれは信じよう。ポンペの裏切りは私の憎しみがぐらつくのをもはや許しはしないだろう。ポンペは憎しみを頑ななものにした。来なさい、セルトリウス、ポンペは沈黙によって拒み、私の一切を殿に返したのです。この偉大な証人を盛大な結婚式に招待しましょう。余所に向けられたかの心は何ら気詰まりなこともないでしょう。結婚式に平気で参列しよう、この鈍さがシルラの所では寛大と言われるのです。

ポンペ

シルラがそちにした不法な行いは予をも痛ましめる。しかし、結局はそちを愛しているのだし、これ以上のことはできない。そなたは、かつて我が想いを寄せた相手であったのだから、苦情を言い、憎しみを吐いても構わない。でも誰のものになってもいけない。いつまでも我が妻で留まっていた欲しい。墓に行くまで、我が魂を自分のものにして貰いたい。シルラは一時の間しか生きない、もう老いぼれ、衰弱している。かの男の支配はまだ終わっていないとしても、遠からず終わるだろう。絶大な権力がシルラの負担になり、それを辞する用意をしている。セルトリウスにしたように、そなたにこのことをよく分かって貰いたいのだ。だから、奥方、他人の腕に飛び込んではいならない。嘆き、憎むがいい、しかし、その身を与えてはならない。もし予との結婚を望むなら、そなたの身は自由にしておきなさい。

アリスティ

では何でしょうか？殿は他人の腕に抱かれなかったとでも？

ポンペ

その通り、秘密を明かさねばならないので申すが、エミリは不承不承シルラに従ったのだ。あの潜主は別の男からエミリをもぎ取ったが、その心中にある聖なる絆まで切り取れはしなかった。エミリのお腹には愛の果実が宿っていたのだ。それは間もなく我が家で生まれようとしていた。このような次第で、シルラが予に命じた結婚は奴の眼を騙すだけのものだった。他方、愛するグラブリオンにすべてを捧げ、エミリは我が妻と見えながら、ただその名を取ったに過

ぎなかった。

アリスティ

そのただの名のみが私のような女にとってはすべてなのです。エミリが持つて偉大な名を私にお返しください。私は殿の優しさ、細やかな心配りを愛してました。でも、私はそのような愛着を越えているのです。我が命が絶ち切られても、ポンペの妻として先祖の間に戻るなら、また我が墓に刻まれた偉大な称号が私の身分を未来のものに示すなら、一切は歓びとなりましょう。それこそ我が栄光であり、歓びなのです。一瞬でもそれを失うことは、烈しい痛みなのです。私からそれをもぎ取ったシルラに復讐をなさい、あるいは誰かが私のために殿とシルラに復讐するか、婚姻によってそれに匹敵する尊称を私に授けるか、シルラが私を貶めた分だけ、私に名誉回復をもたらす殿を見つけることをお忍び下さい。殿以外の方を愛するからではありません。私の栄光の仇を討つために、伴侶が必要なのです。世に知られた輝かしい夫、その名前は...

ポンペ

愛するに飽きてはならないが、愛されるには飽きなさい。多分、我らは願ってる時に近づいていよう。その時は分け隔てたものを繋ぐことができよう。さらに大きな勇気を、もっと余裕を持ちなさい。シルラが死ぬか、その権力を手放すかを我慢強く待ちなさい...

アリスティ

シルラが死に、あるいは後悔するのを待つんですって！殿が忝なくも私に名誉を返されるとは！あの潜主が望むままに権力を握ったあげくそれを手放すまで、殿の心は氷のように冷たく、潜主は罰を受けず、私の恋敵が私の居場所を占領しているのを見ていると言うのですね？

ポンペ

シルラが全権を握ってる限り、私に何ができようか？

アリスティ

あなたの妻の逃亡にどこへでも付いて行くこと、あなたの軍団とともに妻も連れていくこと、我らの仲違いを平和に収めること。ヒスパニア以外、至る所で勝利した軍隊の先頭になぜ立とうとなさらないのですか？セルトリユスと殿が合流したら、潜主に何ができるでしょう？その

憤怒も無為ではありませんか？

ポンペ

僅かな間そう見えることが、自由になることではない、主人を変えることが鎖を断ち切ることもない。セルトリユスはそなたにとって素晴らしい支えである。だが、私がそうすることは、セルトリユスの下に身をおくことだ。我らの軍旗を合わせることは、セルトリユスの支配を増大させることにしかならない。セルトリユスと組んだベルペンナを見ればよく分かる。予にも主人がいる。しかし、ここまで届く命令は非常に遠くからやって来るので、それを受け取る時には反故同然になっている。予がいささかなりとも下手に出ているのは、真の権力を手にしたいためで、実のない表向きのごとに過ぎない。奉公するのもう僅かな間に過ぎまい。シルラがこれほど都合のいい変り方をしようとしているとき、いつの日にかローマに全面的な自由を取り返すために権威に執している予に向かってローマから立ち去れと命じ、ローマを他の一人の人間の支配にまかせて再び鎖に縛りつけることができようか？そんなことはないはずだ。予が信じるようにそなたが私を愛してる限り、そなたの愛と、予の栄光は調和できるし、時の変わりに慎重に備え、そなたの復讐をやり遂げて予は滅びないでいられるはずだ。

アリスティ

殿が私を愛したことがあったなら、それを未だ覚えておられるなら、私の栄光を私に返すのが筋というものではありませんか。もうこの話し合いを終える時が迫っています。殿、私を求めているのか、いないのか？仰ってください、殿の返事が私の運命を決めるのですから。私は今なお与えられた夫のものなののでしょうか？セルトリユスのものなののでしょうか？もう話し合いは尽くしました。私に殿との絆を戻すか、さもなくば、完全な自由をお与えください...

ポンペ

わかりました、奥方、セルトリユスとの婚姻を無に帰するには、征服者としてそれを破らなければならないから和平は破棄しなければならない。奥方は我が身を護るすべを知らなすぎるので、それを教えるにはそなたを征服しなければならない。

アリスティ

セルトリユスは勝つ術も、その戦利品を保つ

術も知ってます。

ポンペ

そなたを戦利品として維持するためには、多くの死者を出すだろう。この戦利品はどんな妥協にも応じようとするのだから、予が死なない限り、何物もその安全を脅かすことはできない。そうだ、神々に誓って言おう、セルトリユスがそなたを手に入れようとしたら、予が死なない限り何物も奴の滅亡を止められるものはない。おそらくは、我ら二人とも互いに刺し合って、そなたが我らに何を強いたか、そなたに教えることになるう。

アリストイ

私はさほど重要な者ではありません。他の思いが復讐の熱意を消してしまうでしょう。権勢を強めたいという野心から、殿は他に関心を向け、よりよい運命を開こうとなさるでしょう。シルラに奉公し、そのエミリを愛し、イタリア中に尊敬の念を広め、ローマにいつかその自由を返そうとする意思是、その矛先をどこか別の方向に変えることでしょう。とりわけ、権勢を握った者に与えられる好き放題に夫や妻を取り替える特権は、世界の果てにまで誇示してその例をあまたの地方に示す値打ちがあります。

ポンペ

それはあまりの言い草、奥方、予は再び誓おう...

アリストイ

殿、真実に侮辱が入り込むものでしょうか？

ポンペ

予がそなたの夫であることを忘れていなさる。

アリストイ

その呼び名が殿の気に入るなら、私は殿のもので。私の手をお取りください。

ポンペ

それを私のものになさってください、奥方。

アリストイ

ローマに別の妻をお持ちなのにはですか？再婚によって私の名誉を汚したのにはですか？この一瞬が過ぎ、殿が失せた後、殿が破った約束を私が守るようなら、殿が誓いをたてた神々よ、我を罰するがいい。

ポンペ

一体何をなさるおつもりで？

アリストイ

殿が教えられたことを。

ポンペ

これほどの愛を消すとは！

アリストイ

殿自身そうなされた。

ポンペ

勝利すれば愛も再生する。

アリストイ

私の憎しみが微々たるものであっても、勝利は憎しみを成長させる。

ポンペ

私を憎むことができるので？

アリストイ

それが私の願いのすべてです。

ポンペ

では、暫くお暇を。

アリストイ

さらば、とこしえに。

第4幕

第1場

セルトリユス、タミル

セルトリユス

女王に拝謁が叶うかね？

タミル

女王がやって来るまでの間、殿とお話しよう命じられました。もう暫く一人でいたいよううで。

セルトリユス

女王の気持ちがどちらの方に傾いているか教えてはくれぬか？ペルペンナの望みはどのくらいあるだろうか？

タミル

打ち明けたお話はあまり私になさらない方で。敢えてうがちますと、殿の手から差し出されたものなら、女王のつれなさを解消するに造作はないでしょう。殿は女王に全権を持っておいでです。

セルトリユス

いや、わしのやれることは僅かなものだ。わしの不幸な運命が女王を動かして、我が求婚を受け入れようものならば、いやもつとはっきりと言おう、わしには過ぎたことであり、僅かな報いでもあり、あいだはないのだ。

タミル

わが恋を焚きつけることで、大いに殿の気に入ってると思っています。

セルトリユス

わしの気に入る？

タミル

そうです、でも、殿、なぜそのように驚くのです？女王を蔑ろにしていたお心が何に怯えておられるのです？

セルトリユス

女王にお会いした途端我が胸を強く打ちつけた高鳴る恋心を蔑ろなどと呼んではならない。

タミル

殿の想いに似た強い打撃はありません。もしそれが他の女人への気遣いのためでしかないのなら、そのように打ちのめされたお方が礼儀正しい振舞いに及ぶよりも、僅かながらも顔を赤らめたいものです。

セルトリユス

漏れ出た溜息が一瞬にしてふいにしてしまうようなものは何も洩れはしなかった。新しい欲求に過敏な女王は私の理屈はよく聞いたが、溜息は聞かなかった。

タミル

殿、ローマ人が、英雄が溜息を吐くときには、それが何を意味するのか我々にはよく分からないものです。殿がもっと明瞭に仰ったなら、私が殿の意を伝え申し上げます。この地方では、ローマ人は野蛮と名づけておりますが、たった一つの溜息が時には愛の告白となるのです。しかし、栄光こそ殿の情熱の一切ですので、このような繊細な徴には頓着されないので。ロ

ーマの偉大な武将にとってはあまりにも無価値な欲求。．．

セルトリユス

ローマ人だからといって、わしはやはり人間なのですぞ。わしは恋している、おそらく今までの誰よりも激しく。この年にかかわらず、わしの心は燃え立っている。わしは自分を抑えられると思っていた。だがどのようにしようと、全力で奮い立とうと、自分の弱さを知るばかりだ。政治の仲間、友情で結ばれた仲間は、わしを憐れむべき状況に投げ入れたが、それを思い起こすと耐えがたい苦しみだ。私の定まらない人生は女王に期待するかすかな望みにかかっている。もし、にもかかわらず。．．

タミル

女王は親切な方です。でも、その心は激しく猛り立っています。殿が包み隠さず申すよう命じられるなら、殿は希望を持てます、でも恐れなければなりません。ぐずぐずしてはなりません。何事もおろそかにしないように。女王のお心はまだしっかりとしたものではないはずです。お見えになられました。私の意見をよくお守りください。特に、女王が私を疑ったりしないよう十分ご注意を。

第二場

セルトリユス、ヴィリアト、タミル

ヴィリアト

アリスティの計画は挫け、ポンペはかの聞こえた美貌のお方を逃したとか、そうなのですか、殿？

セルトリユス

まことにそうなのです、奥方。アリスティを棄てたと言っても、心中では愛しています。そして、アリスティがわしと結婚するようなことがあると、明日にも和平を破ると言いました。

ヴィリアト

脅されても、殿は泰然としておられるようで？

セルトリユス

実は、わしをもっとも困惑させるのはその事ではないのです。ところで、そなた、ペルペンナについてどのような決心をなさいました？

ヴィリアト

絶対の権力に滞りなく従うこと。ばかげた申し込みに殿の心が揺れても、ポンペのお払い箱を厄介払いしようとなさるなら、ただ殿の決断次第で、明日にでも二組の婚姻が我らの絆を固めることになりましょう。

セルトリウス

女王は明日にでも．．．

ヴィリアト

今にでも、先延ばすのは服従とはなりません。緩みのない服従とは、一刻の遅れも許さないことに自尊をおくものです。

セルトリウス

私の願いとあれば女王の意に添わないこともあるのをご容赦を。

ヴィリアト

逆らえない命令ならば、どんな屑でも受け入れましょう。我が意のままにできる方の願いは命令と同じです。その上、ペルペンナは私を熱烈に愛している。かの血は多くの婚姻、多くの王族に由来しており、その保持している大きな権力は、殿の気に入ったがために存続しているに過ぎない形だけの王位すべてを合わせたものに匹敵する。

セルトリウス

女王の決定のおかげで、わしはもう死にさえすればよい。女王自身の口からこの命令を受けたのだ。わしが今や受け入れなければならない変えようのない命令だ。ローマ人を愛するからには、女王はその殿が指揮権を握ることを求めている。ペルペンナはわしが死なない限り指揮権を掌中にできないのであるから、女王の王位を満たすためには、我が命が必要な訳だ。奴と結婚するとは、女王、陣営において、あなたの胸中において、我が場所を奴に譲ることなのです。このような幸福に恵まれたからには、ペルペンナが軍において、あなたのお心において席を占めることは、それはあまりにも当然なことといわねばならない。それがしは不平を漏らすことなく従いましょう、そして我が命がすぐに．．．

ヴィリアト

この命令で殿から王位が奪われる前に、友と言うより恋敵から来るような気まぐれな変わり

様について殿に苦情を申しあげてもよろしいでしょうか？殿は私がペルペンナに示した好意をあまりに性急に、あまりに真剣なものにお取りになった！私が用意している結婚は殿には苦痛なのでは！あたかも殿は私を愛していたかのように、お話をされた！

セルトリウス

愛という言葉を目にしては、女王の足下で死ぬことをお許しください。私の幸福をあなた様のために喜んで捧げます。ただ貴女様が他人の腕に抱かれるのを見ることはできません。それがしが聞きはぐれた愛がそれがしをどんな窮地に追い込んだか十分お分かりでしょう。

これほどの美貌なら許されることとはいえ、愛されるに値しない歳で愛するのは恥だと思っておりました。我が白髪を見てはその想いを禁じていたのです。そして、長らく、女王の無視に甘んじていました。しかし、女王の心に他の考えのあることを後で知ったのです。その考えの上に、たちまち私の願いが建てられました。そなたの選択が愛によって導かれていないことを知って、女王の王達よりも自分に多くの希望があると思ったのです。私は告白しようとしていました。アリストティの申し込みもなかったのです。それがしの情熱が緩んだのではありません。公の幸福のためにすべてを投げ出す偉大な精神がいることを少しも疑っておりませんでした。ペルペンナの愛とこの考えが結びつきました。その後のこと、私のこころにない理屈はご存じでしょう。それがしは信じ込んでいたのです。この愛を断念する苦しみもいくつかの溜息を洩らすにとどまる。雅量のある友人、寛大な首領との評判を得れば慰められよう。しかし、運命の一撃を前にして、私の苦悩は自分の力以上のことを約束してしまったことを明かしたのです。従って、女王、それがしは降参します。我が命を思うようにしてください。再び、それをあなたに捧げます。ペルペンナを愛しておられますか？

ヴィリアト

殿に服従することは心得ておりますが、愛するとか、憎むとかについては心得がございません。先ほど殿が私の心中に分け持っているものと言われたのは、私の誇りに由来するもので、情熱に由来するものではありません。そのようなものはペルペンナに持っておりませんし、かつて殿に持ったこともございません。私が欲しいのは愛する方ではなく、配偶者なのです。そ

れも武勇に秀でた武將、私が生まれつき保ってきた王位を高く掲げ、ヒスパニアの有力な支えとなり、我との間に真の王を残すようなお方なのです。

そのお方こそ殿に見出したのです、私を袖にしてかの恋に憑かれた男のために好意を払うという迂闊さえなければ、そして、われが殿をあまたの王よりも高くおいたとき、殿の棄てた女がその恋敵の連れ合いに値するという愚かな行為さえなかったなら。でもそれは忘れましょう、殿を許します。私を愛しておいでで？

セルトリュス

女王を娶るなどと言う身の程知らずなことができますでしょうか？

ヴィリアト

娶りなさい、同意します、殿、明日にも、ペルペンナに代わって私と式をあげるのです。

セルトリュス

ただ自己満足に耽るだけで他に何も知らない、自分の幸福に充たされて女王の威厳に配慮を払ったりしない遊び心に満ちた恋の方がなんと喜ばしいことか！それがしが女王に言ったかも知れないことを忘れてくださったのだから、私も又、女王の国を強大にする、女王の偉大な計画は支配することであることを忘れてもよろしいでしょうか？

ヴィリアト

殿、あなたを赦すとは、殿と私を遠ざけることなのですか？

セルトリュス

お願いです、女王！今こそ目の眩むようなお赦しのとき！

ヴィリアト

その目の眩む輝やかしさを、ヴィリアトは求めているのです。

セルトリュス

事を急いではずべてをし損じますぞ、ペルペンナは情熱に駆られて謀反に奔るでしょう。もう少し時を与えてペルペンナを宥め、他の美女を奴が愛するのを待ちなさい。アリストティの友人達が、何度も何度も約束を与えていつまでも引き延ばし、助けてくれる。連中を興奮させている希望を一切断ったら、連中を絶望させ、ポンペに一息つかせることになります。ポンペの

揺らめく心は疑いから疑いと彷徨い、アリストティを我らの側に確保できるのです。これらの支持を失ったら、ローマに復讐できるでしょうか？ローマを悩める内乱から解放できるでしょうか？また、その利益を何の躊躇いもなく捨て去ったなら...

ヴィリアト

構うものですか、私にとっては、ローマが苦しもうと苦しまいと何だというのですか？私がローマの悪行の汚名を消し去ったとき、私には報いとしてローマの友人の名が与えられるでしょう。殿は執政官として私を支配することになり、御自身で私を他の王達と同列に扱うのではありませんか？殿が私を愛されるなら、我らの広い海、山々が、我らのヒスパニアが殿の野望に限りをつけるはずです。我らはここで十分に華美な運命を求めることができ、アヴァンタン⁽¹⁵⁾の麓に余計な栄光を求めに行く必要はないはずです。ル・タジュ⁽¹⁶⁾を解放しましょう、チブル⁽¹⁷⁾は放っておきましょう。全世界が自由なら、自由は何物でもありません。でも、世界中が軛に縛られ、鎖に喘いでいるとき自由は素晴らしいものです。この特権を奴隷のローヌ⁽¹⁸⁾、囚われのローマの眼にひけらかしてやりましょう、そして、打ちのめされた民族から、運命が勇敢なものに与える尊敬が消し去るのは気持ちのよいものです。偉大なペルペンナについては、いかに恐るべきものであるとしても、かの殿を牛耳やすくする手筈は私にお任せください。私は偉大な心が過ちを犯さないようにするすべを心得ております。

セルトリュス

そうしてどんな果実を摘むお考えかな？わしも奥方同様知っている。そして、この不意の命令が我らの頭上にどんな嵐を巻き起こすかも分かっている。反逆の徒を作るのは止めましょう、我らのよき運命と仲違いするのも。ローマはそうでなくとも、女王との結婚に同意する前に多くの難儀を突きつけてくる。ローマが我らに栄光と自由を負わない限り、その頑固さを壊めることは決してできない。

ヴィリアト

更に言いましょう、殿、結婚に同意するどころか、殿に憎しみを持つでしょう。鎮まらない怒り、頑くかな自尊心、それ故に、殿をここに留めたいのです。私がローマでなすべきことがあるでしょうか？なぜ、お願いですから...

セルトリユス

だが、我らローマ人は、奥方、皆祖国が好きなのです。ローマ人が労苦をものとしません。はただ一つの喜び、早く勝利して祖国を再び目にするにすることにあるのです。

ヴィリアト

皆のものをル・タジュのほとりに縛りつけるには、ローマを隷従の中に放っておけばよいのです。ただ一つの選択、潜主か王しか選べない限り、あの輩は喜んで、殿と私の支配の下で生きます。

セルトリユス

彼らはどちらにも似たような嫌悪を覚える、女王の夫に従いはしまい。

ヴィリアト

潜主も王も持たない政府のある好きな地方に行くがいい。我らヒスパニア人は殿の兵術に教えられて、ローマ人がいなくても、残されたことはやってのけます。

シルラを滅ぼすのは私の本意ではない。私の誇らかな願いに比べれば、ローマは色褪せて見える。私の求める結婚は離婚が当たり前の都市では沸き立つようなものではない。我が王位の高みからは、一年だけ支配者でその後は何物でもないところなぞ魅力がない。しまい申し上げるが、私は殿のためにローマ以上のことをした。ローマは殿を追放した、私は殿を庇護した。ローマが殿から奪おうとした命を私は護った。王冠をお取りください、それに仕えるのです。前代未聞のことを試みるのは素晴らしい。たとえその結果から、その意志が裏切られたとしても、私は偉大なローマ人を偉大な王にしたいのです。殿、ここで滅びるとしても、私と共に滅びるのです。愛する者に仕えながら死ぬのは光栄の至りです。

セルトリユス

即座に物事を進め、無用にも、不平不満の徒をつくるとは！一層長く幸福でいるためには幸福になるのはもっと後でよいではありませんか。一つか二つの勝利が何かの巧妙さと組み合わせても...

ヴィリアト

ご存じのように、私は愛に急かされているではありません。殿、ともかく、はっきりと言

わねばなりません。私はこのような用心深さに飽きてきたのです。私は女王です、王冠を被る者です。かような者が何か言うとき、あれこれと詮議するのは好みません。私は自分について考えようと思います、殿はご自身について考えなさればよい。

セルトリユス

あなたが不当な怒りに耳を貸したとしたら...

ヴィリアト

怒りなどありません、殿。私の不安は私の運命がどうなるか定まらないところから来るのです。私がどう運命を決すべきか、明日殿は私に教えてください。その間、殿を相談する相手と一緒にさせましょう。

第三場

セルトリユス、ペルペンナ、オフィド

ペルペンナ (オフィドに)

この野郎！誰が女王を隠せるものか？

オフィド (ペルペンナに)

かの殿が心に悩めることを持っているようで、我らが近づくと、すっかり狼狽の体で。

セルトリユス

ポンペについてここではなんと噂されているかな？門から遠く離れたところで会ったのだろうか？

ペルペンナ

城壁の近くでは、護衛を従えておりましたので、ポンペを遠ざけるのは御免被りました。ところで、殿の助けを大いに必要としているのです。かの表情にはすこぶる高い自尊心が現れ...

セルトリユス

我らは何の約束もしていない、それはわしの罪ではない。貴公も知るように...

ペルペンナ

このような話し合いでは...

セルトリユス

わしは武器を棄てるべきだとは思わなかった。

まだ、その時ではない。

ペルペンナ

どうか、お続けください。まだ友情が倦むときではありません。

セルトリユス

貴公の利益がわしと同じく、わしを止めたのだ。もしわしが不利な状況にあるとしたら、貴公もよい状況にあるとは言えないだろう。

ペルペンナ

実に、殿の支持がなければ、私は大変惨めな者でありましょう。でも、殿については何ら心配の種はありません。

セルトリユス

わしが人のうらやむ一番目の人間になろうとも、次には、運命は貴公の上に恵みを与えよう。潜主はわしの次には、他の誰よりも貴公を恐れている。わしの首が飛べば、貴公のも危うくなる。我ら二人にとっては一年以上待つのがよいだろう。

ペルペンナ

何故そんなお話を、殿、首とか、潜主とか？

セルトリユス

シルラについて言っているのだ。貴公は奴を知るべきだ。

ペルペンナ

私は女王が生み出した恋について語っていたのです。

セルトリユス

我らの心は同じように宙に浮いていたのだ。わしの関心はあげて和平が破れはしないかというところにあった、わしは貴公に町中でどんな噂が流れているのか尋ねたのだ。ポンペとわしの話し合いは実りがなかった。おまえは知っているのか、オフィド？

オフィド

何も包み隠さず申しますと、かの供奉の者たちは素行が悪く、人々の間に無謀な不満が起きはしないかと案じております。シルラはその独裁を離れたと言われております。殿一人が平和の到来を拒み、終わることのない戦争をしようとしているとも。既に、我らの兵士の心もポンペに傾いて、ポンペについて語るに喜びの表情

が出る有様です。もしこのデマが兵營の中にまで広まったら、危険な毒をまき散らすことになりましょう。

セルトリユス

間違いが広まる前に、その流れを断ち切ろう。我らの配慮でその奸計をつぶしてしまおう。もっと大きな危険からも、天はそれがしを護ったのだ。

ペルペンナ

提案を受け入れてもよいのではないのでしょうか、殿？その提案は恥ずべきものと、あるいは信用できないものとお考えなのでは？

セルトリユス

シルラは実際その独裁を手放すかもしれない。同じく、意のままに執政官を任ずることもできる。紫の衣を纏った奴隷はシルラの指図に従って行動する。シルラの恐ろしい指図を恐れることがなくなった暁には、卑劣な臣下達の命令によって滅びることになるのだ。わしの言うことをよく聞け、貴公たち二人やわしのようなものにとって、信頼を寄せすぎると危険なことではない。シルラは政略から兵士達には決して罰しないと言う策をとった。しかし、シンナ⁽¹⁹⁾、カルボン⁽²⁰⁾、マリウスの息子⁽²¹⁾については、首を要求しすべてを殺害した。それがしについては、陣営の者たちは噂を聞いてわしから離れていっている、我が身一つしか残っていない始末だ。シルラが生きてる間、執政官職を手にしようと出発するより早く、どこか名も知れぬ土地で自害するだろう。貴公は...

ペルペンナ

私の想いは受け入れられないのでしょうか？あの方を愛するのは、恋するのは無益なのではないでしょうか？

セルトリユス

女王が消えたことを見れば、わしが話すよりも一目瞭然だろう。

ペルペンナ

その意味は明らかです、殿、終わりまでお話を。ご存じのことは何も隠されないよう、殿は私に徒な望みを与えられたのでしょうか？

セルトリユス

違う、わしは女王をそなたに譲った。貴公との約束も守る。わしは奥方を愛している。わし

の想いにかかわらず、貴公に譲るのだ。この譲渡が女王の賛同を得られないのではないのか、我らの上に容赦のない憎しみを引きつけはしまいか、心配でならない。貴公にはどう言えばいいのか？ヒスパニアには他にもたくさんの女王がいる。わしが貴公のためにしていることを、貴公がわしにしてくれたならば、より幸ある運命が貴公を訪れるのではあるまいか。ヴァセアン⁽²²⁾の女王、イレルジェット⁽²³⁾の女王は、貴公の想いを一層満足させるだろう。奥方も熱心に貴公のために尽力されるだろう。

ペルペンナ

殿は奥方を私にくださると約束された、そして、今度は私から奪い取ろうとなさる！

セルトリュス

わしの約束、女王を貴公に譲ると言っても、女王の野心が私個人と結びついているのだから何になるというのだ？この結びつきの理由は知っていよう。先ほど内々に話したとおりで。もう一度、同じく内密の話をしよう。貴公の愛情を少し抑えるのだ。わしは自分の愛を制したし、今でもそうする用意は出来ている。我が党の利益を優先すると、頑固な女王を苛立たせることになる。女王は配偶者の選択に運命を賭けているし、その援助は十年以上我らの同士よりも我らを支えてくれたではないか？

ペルペンナ

我々にとって女王は邪魔な存在と思っておられるので？

セルトリュス

いや、女王は我らを少しも破滅できない。ただ貴公がわしを約束に縛りつけるなら、明日から我らを敵と扱うだろう。連中の陣営はあまりに近くにあり、ここでは不満が渦巻いている。この状況で何を恐れるべきか、どんな即効薬を用いられるか、女王を腹立たせればどんな結果になるか考えるがいい。

ペルペンナ

自分にうち勝つのは私の領分であり、理性の命ずるところでもある。ただこんなに遠大な計略に我が胸は震え．．．

セルトリュス

無理な抑制はいらない、たとえ我が命を賭けようと、愛してしようと、約束は守る。

ペルペンナ

殿の約束もヴィリアトの承認がなければ空約束では．．．

セルトリュス

奥方の方については、貴公に希望を持たせるようなことは何も言うことができない。

ペルペンナ

それでは自分を抑えなければならない、その決心はついている。そうだ、自分の欲求すべてにわたって、私は紛れなく力を揮っている。殿の例に従い、この日、それらの主人となるつもりだ。あまりに大きく育つままにしておいた愛にかかわらず、殿は女王に言うがいい．．．

セルトリュス

それでは、言ってよいのかね？

ペルペンナ

殿、まだ何も言ってはならない、明日、よく考えてみる。しかしながら、女王は怒り猛って、今夜にも陰謀を巡らすかもしれない。殿は言いたいことを女王に言えばよい。私は、殿が私のために決めたことに従うことにしよう。

セルトリュス

殿を賞賛するとともに、憐憫も感じる。

ペルペンナ

私の心は打ちひしがれております！

セルトリュス

女王の傷心を分け合おうと思う。しばらくの暇乞いを、女王の悲しみを慰めるためにしばし中へ入ろう。宴会の時に貴公の部屋に行こう。

第四場

ペルペンナ、オフィド

オフィド

あの親しい主人は殿のために数々の驚異をやつてのける。殿の恋心は例のない好意で迎えられる。女王の名一つだけで、本意になく、殿からすべてを奪い取った。女王はセルトリュスが口を開くやすぐに退出した。女王の殿への愛に値するには、殿はどんな奉公をすれば望みを持てるのか？そして、何時になったら女王に目障りなあゝの有名な美女をここから追い出せるのか？女王は恩知らずではない、女王が自らに

服従させるために発する掟はたいしたことを約束しない。でも、どんな褒美が与えられるかは女王に任せるがいい、そして躊躇うことなく、女王の命令を実行するよう走り回るので。殿は何も仰りませんか？どうか、私に明かしてください、宴会がどのように執り行われるよう決心されたのか。殿は忠誠心を隠しておいでなのか？そして、殿の欲するところ、...

ペルペンナ

それについて決めるため、私の部屋に行こう。

第五幕

第一場

アリストティ、ヴィリアト

アリストティ

そう、奥方。私もあなたと同様ローマの敵なのです。女王は偉大を好み、私は恥辱を憎む。私は復讐を求め、あなたは権力を求めている。お互いに胸を開いてあなたの権力と私の復讐を一致させなければ、あなたは私を滅ぼし、私はあなたを弱める。私はポンペを奪われた、ポンペ、忠実に私を守ろうとしなかった恩知らずに挑戦するために、私はポンペより抜け出た、あるいは匹敵する配偶者を探している。あなたの恋敵になろうとは少しも思っていない。そもそもローマ人に女王が求婚の手を差し伸べるなど、また、ローマ魂に溢れた英雄が女王と結婚してその名に背くなど、前もって知れようはずがなかった。私は、セルトリウスの生まれとあなたの威信を思えば、ともに反発しあい、二人の誇りが互いを別れさすだろうと思っていた。そのうち、セルトリウスが結婚に同意し、この日の選択に逆らっても無用だという事を耳にした。というのは、明日、セルトリウスが王冠の輝きに飾られなければ、女王は自分の国と党との縁を切ろうとしているからです。

私は我が方の力を増すことだけを目的としているので、どこでもシルラの敵を作ろうとしているとき、このような分裂をもたらすシルラのすべての仲間よりシルラの助けになることをするなんて、たいそう腹立たしくなりません。お話をさってください、あなたが私がどんな希望を持っているか思ったにせよ、あなたがセルトリウスとの結婚を望むなら、私は我が願いを取り下げます。他の残っている、より正当でよ

り喜ばしい願いがあるために、セルトリウスがあなたのものになるのを苦痛なく忍ぶことができるでしょう。私の心は奪い取られたという怨みを常にポンペのためなら棄てるつもりです。ポンペは愛の故に私を裏切るのに困難を感じましたので、私は復讐を誓ったものの、ポンペを憎むことはできませんでした。私が何も隠さなかったように、包み隠さずお話ください。

ヴィリアト

ヴィリアトもまたあなたに率直にならねばなりません。それにしても、あなたに隠し事などできないほど、よく事情をご存じだ。私はわざわざセルトリウスをアフリカから呼びました、横暴な権力から私の国々を護るためにです。私の隣国が征服されるのを見て、私はセルトリウスがいなくては、我が王達などシルラには役立たずの支えに過ぎないと思ったのです。1艘の船であの偉大な英雄は上陸しました。そして私の部下とともに、戦争を始めたのです。私は駐屯地も船着き場も殿の手に渡し、王杖と財宝を預けました。それ以来勝利を知ったのです、勝利は日に日に殿の力と栄光を増していきました。我が王達も桎梏に繋がれ、ローマ人の迫害に曝されるのに倦み、あらゆる地方からセルトリウスのもとに馳せ参じたのです。遂には我が幸運の軍を率先してローマ人をピレネ山麓にまで追いつめたのです。セルトリウスが我が眼にする地位に上がってからは、私にふさわしい大殿としか思えなくなりました。殿の栄光は私の成果でもあると思い、他の女人がその栄光を奪うくらいなら私は死にましよう。私の臣下達は支配の術を知る血筋のよい君主を与えるのに十分値します。その者どもは、ローマの世界の潜主に抵抗でき、我らのヒスパニアを勝利の月桂樹で飾り立てて、いつの日にかポー川⁽²⁴⁾がその侵攻を恐れ、チブル川の岸辺さえ震えるようになるのです。

アリストティ

あなたの計画は雄大だ、しかし、セルトリウスは何を望んでいるのだろうか、...

ヴィリアト

あなたが私に言い聞かせようとしている理屈を、セルトリウスから聞きました。私に願いを持たせた栄えある結婚について沈黙し、遅らせる方がよいだろう。今日、かの偉人に提案された和平はローマへの道に門を開くこととなります。殿がローマに戻るのには、私にとってセルト

リュスを失うことなのです。私は結婚によって殿をローマから追いだしたいのです。私の考えを明かすのが危険であるとしても、確実に滅びるよりも危険の方がましです。あなた方すべての追放者が離ればなれになっても、彼らの助けがなくても、我らはよき運命の支持を得られるでしょう。私の人民はローマの規律によって戦争に馴れましたが、支配欲に動かされるローマ人の心は決して受け入れないでしょう。戦い、打ち負かし、勝利するのが唯一の関心なのはローマ人なのです。セルトリウスが先頭に立ち軍を進める限り、彼らは恐れることなく征服から征服へと歩を進めるでしょう、このような偉大な例に相応に従うならば、．．．ところで、あの見知らぬローマ人は我らに何を求めているのか？

第二場

アリストイ、ヴィリアト、アルカス

アリストイ

女王、アルカスです、私の兄弟の解放奴隷、あれがここにやってくるとは何かがある。話さない、アルカス、

アルカス

この手紙を読めば、私よりもよく事の成り行きを説明するでしょう、私もまだ信じられないくらいで。

アリストイ（読む）

親愛なる妹御よ

汝の喜びのために至急知らせ申そう、我らの苦難、そちの苦痛が間もなく本当に終わろうとしている。シルラは自分のなしたことについて説明しようとして、飾り鉞⁽²⁵⁾も飾り斧⁽²⁶⁾も持たずに、公然と市中に姿を見させている。

シルラは元老院の中でその権力を辞した。ポンペがそなたにいささかでも情を残しているのなら、ポンペの再婚はたった今破れた。エミリは産褥の中で死んだ。シルラ自身、多くの憎悪を鎮めるために、大変親しかった愛がもとの形式に戻ることに、汝が結婚によってはじめの絆に返ること、そして、ローマに自由を戻すことに同意した。

クインツス アリスチウス

私に過酷な運命を課すのに天も飽きたのだ。こんな幸運はおまえと同様、私にも信じたい。

ポンペの陣営に走り行きなさい、そして、言うのです、アルカス、．．．

アルカス

大殿はもう知っておられます。そして、ローマへとって返しました。シルラから重大な政変についての手紙を殿に渡すよう指図を受けて来たところ、ここから二千哩⁽²⁷⁾のところで大殿に会うことができました。

アリストイ

どんな愛を、どんな歓びを殿はお示しになられたのか？なんといい、何をなされたか？

アルカス

奥方の経験から大殿の性急さはお分かりなさいましょう。ところが、愛の感激の故、あなた様の方へ呼び戻され、陣営には戻れなくなったのです。この大きな出来事のため陣営の必要とする命令は陣営に戻るまで止められることになりました。大殿は私のすぐ後に来ます。私を先に行かし、奥方がよもや思いもしなかった出来事を告げるようにしたのです。

アリストイ

あなたも同じくお喜びになる理由があります。奥方には恐れも、恋敵もなくなったのですから。

ヴィリアト

あなたについては何もなくなりました、それは疑いないことです。しかし、私にはもう一人の敵、もっと恐るべき敵が残っているのです。ローマ、かの英雄が自分よりも愛するもの、確かに王位よりも好むもの、もしこの愛に反して、．．．

第三場

ヴィリアト、アリストイ、タミル、アルカス

タミル

女王様！

ヴィリアト

どうしたのだね、タミル、何故そんなしおれた顔をしているの？おまえの涙は何を語っているのだろう？

タミル

女王は破滅しました、女王を護ったあの腕も、．．．

ヴィリアト
セルトリユスが？

タミル
あの偉大なセルトリユス．．．

ヴィリアト
最後までおっしゃい。

タミル
女王、セルトリユスはもう生きてはおりません。

ヴィリアト
もう生きてはいないですって？なんということ！おまえは誰に聞いたのだね、タミル？

タミル
殿を殺した者たちが、誇り顔にそう言うております。あの残虐なものたちが、猛り狂って、不実な者の命令によって殿の運命を絶ったのです。殿の血に染まって皆町中を走り回り、兵士達と愚かな人民を立ち上がらせ、連中によって将軍にペルペンナが推戴されたことは運命の一撃がどこから来たのかただもう明白に示すだけです。

ヴィリアト
ペルペンナは私に一切を明かしてくれた、張本人も、その理由も。この殺害によって私を意のままにしようとする。征服しようとしているのは、私の王位、私の身。私の正しい選択がセルトリユスを滅ぼすことになった。奥方、殿が死に、この緊急事態の最中で、私から溜息や涙が出ると思ってはくださるな。それは痛ましく深い傷に対する素早く高貴な傲岸が侮蔑するまやかしなのです。涙する者は苦痛を和らげ、溜息する者は苦痛を散らします。王位にふさわしい魂にはもっと誇りが要りようなのです。私の苦痛は殿の復讐の計らいに専心して．．．

アリストイ
奥方は危険の最中であって盲目になっておられます。逃げることを考えるのです。

タミル
もう時間はありません、オフィドが宮殿の門を不実者のために守り固め、女王の牢獄にしてしまい、ペルペンナのために女王を責任を持って監禁しているのです。ペルペンナが来ます。

正しい怒りもお隠しなさい、よい時がやって来るまで、どうか囚われの身であることをお忘れなく。

ヴィリアト
私は自分のなんたるかを知っています。そして、常に変わることはないでしょう。たとえ私に天しかなくとも、私が私の助けになるのです。

第四場

ペルペンナ、アリストイ、ヴィリアト、タミル、アルカス

ペルペンナ
セルトリユスは死んだ。女王、セルトリユスの配偶者が昇る高い地位に嫉妬することはない、また、セルトリユスの生前のように、あなた自身の国で他の女性が第一の地位を占めることを心配することもない。もしアリストイの望みがあなたに不安を投げかけても、あなたをアリストイからも、他の女からも守ってあげます。この襲撃の成功はあなたを現在も将来も守ることでしょう。あれは偉大な戦士だった。しかし、その生まれも年齢も奥方にふさわしい伴侶とはいえなかった。こうした欠陥にかかわらず、奥方の気に入ったのは、あなたを圧倒した威信だった。将軍という名があなたにセルトリユスを愛するに値する者にしたのだ。あなたの王達や私よりもセルトリユスは好まれた。あなたは尊称や職務に眩惑された。私は自らあなたに二つながら提供しに来た。あなたの高貴な心が女王によりふさわしいと見えず美点に加えて、支配権を握り王族の出であるローマ人（年のことはさておいて）は女王に選ばれる資格がある。とりわけ、その愛によって女王を侮辱から雪ぎ、その剛勇によって女王を貶める婚姻から解放したのだから。

アリストイ
自分の部屋でおまえの主君を血祭りに上げた後、敵の亡霊に震えているおまえ、悪党、女達を挑発にここまでやって来て、不埒にも嫌らしい恋を誇っている。女王をその宮殿で奪い取り、悪行の報酬として女王との結婚を求めている！神々を恐れなさい、この悪人、神々を、あるいはポンペを恐れなさい。神々の憎しみ、あるいはポンペの腕、神々のいかずち、あるいはポンペの剣を恐れるのです。どんなに罪な傲慢がおまえを盲にしていようと、ポンペはまだ私を愛

している、怯えるがいい、もうじき、この悪党、思ってるよりずっと早くポンペに出会うだろう。ポンペからしかるべき報いを期待するがいい。

ペルペンナ

ポンペが奥方の乱心を信ずるなら、私も死を覚悟しよう。でも、おそらくポンペは信じはしないだろう。私が何度もポンペを打ち負かした軍の指揮を執るのを見るならば、たやすく和平を締結する決心をするだろう。それは先程来、殿の最大の願いであった。私はかなりよい担保を手をしているので、有利に交渉を進めるだろう。その間、奥方はそなたと私の幸運のために、そなたに黙っている人々に声高く話さないでいられよう。この亡きも同然の脅しが苦痛に過ぎるといふなら、私がことを為した後は女王にしたいがままにさせとくがいい。そなたに関わりのない想いを非難したりせず、夫の心を再び取り戻すよう考えるがよるしい。

ヴィリアト

奥方、実際、答えなければならぬのは私なのです。そして、恩知らずにも沈黙しているのは私には当惑でしかありません。あの勇ましい武勲、高貴な感情には私は深い感謝の念を贈るものです。それを延ばすのは、大殿に礼を失するものです。

殿は確かに私に著しい奉公をなさいました。それは殿の偉大さの半分には過ぎません。偉大なセルトリウスはペルペンナの完全な友人でした。それを覚えておくのです、殿、（というのは、あなたが新たに就任された位からこの尊称を用いるべきだと思うからです、この尊称があなたに留まるのは僅かの間でしょうから、あなたにそれを授けることは私には取るに足りないことです）よく聴くのです、あなたのために殿は私の不興を買おうとなさったのです、あの英雄が敢えて私の怒りを浴びようとしたのです、その愛にもかかわらず、私の憤りにもかかわらず、殿は全力を注いで私をあなたのものとしようとされました。あなたが約束を反故にしようとなさらなかったなら、私の目論見はすべて徒な希望に過ぎなかった。殿はあなたのために私の求婚を拒まれたのです。

アリスティ

おまえは殿の胸に短刀を刺した、それからおまえの腕は...

ヴィリアト

奥方、愛の大きさを罪の大きさを測ることをお許しください。自分の部屋で、自分の食卓で、宴会の最中、これほど完璧な友人の暗殺者となる、友情から自分のために尽力してくれる將軍を血祭りに上げる、栄光を断念し、永久に消えない汚名、大罪につきものの恐怖を受け入れる、私の部屋にまでやってきて暴力を働く、私と結婚するため私を無防備のままここに釘付けにする、このこと一切が、殿が忝なくも私に向けられた深い愛にどれだけ私が負っているのか益々よく示していただきます。このことすべては極限まで愛に憑かれた魂が為したことです。もし私を愛することがより少なければ、かの方の罪ももっと軽かったですでしょう。私は恩を知らないものでいたくありませんので、この方に私と結婚なさらないよう忠告します。いつも殿の生命を愛するものに代わって敵を床に入れることになるでしょうから。私はかの人々の心臓を貫く最良の場所を選ぶためにありあまる名誉を受け入れる決心をするのです。

殿、私の感謝のお礼です。更に、私の身はあなたの力の内にあります、あなたはここでは支配者なので、命令しなさい、私をどのようにでもなさい、そして私と結婚なさい、敢えてなさろうとするなら。

ペルペンナ

それがしが、敢えて為すかですって？奥方の忠告が寛容なものであったなら、我が罪を繰り広げるに大した弁論は必要なかっただろう。わしは奥方よりもその残酷さをよく知っている。知るために、罪は十分高いものについた。これほどの裏切り、忘恩の徒となって耐え難い後悔に責められているのだ。奥方のために、セルトリウスを飼ひ馴らし、奥方のためにセルトリウスを滅ぼした。わしはその汚名を着せられ、その果実を手にするだろう。わしの大罪を詰るがいい、わしの首を斬るがいい。これと同じ大罪の戦利品と奥方はなるのだ。たとえわしの幸運が二日間しか続かなくとも、奥方は明日にもわしのものとなる覚悟をするのだ。奥方の憎しみは承知の上だ、それ相応のことをした。その後のことも見通した、それがどんなものかも知っている、わしの戦利品となるとは...

第五場

ペルペンナ、アリスティ、ヴィリアト、オフィド、アルカス、タミル

オフィド

殿、ポンペが到着しました。我らの兵士は反乱を起こし、人民は決起しております。門の扉はポンペの名が出ただけで、ポンペがやってくるという噂だけで開かれました。数の力に譲らない仲間はおりません。アントワヌ⁽²⁸⁾とマンリウス⁽²⁹⁾はばらばらに裂かれ、死に絶え血塗れになっても、まだ、暴虐を受けております。人々は興奮して残りの共犯者を捜し回っております。殿自身が残りの者を拷問に追いやる始末で。私は自分の持ち場を守っております、殿はそれを突如うち破り、自らの手で、ご覧のように私を刺しました。一切の紛れない支配者となった殿はここで護衛を交替しました。ご自身のことをお考えください、私は死にます、伴の者が殿を見ている。

アリストイ

どのくらいの時が、殿、あなたに約束された幸運を手に入れるのに必要なのでしょうか？あなたはよい人質を得て、有利に交渉を運べる？

ペルペンナ

私のためにいささか心配が過ぎますぞ、奥方、わしはここに幸運をものにする手段を持っている。

第六場

ポンペ、ペルペンナ、ヴィリアト、アリストイ、セルスス、アルカス、タミル

ペルペンナ

大殿、私の為したことをお知りになられるでしょう。殿のために、平和の敵を葬りました。殿の奥方の恋人として、かくも名の知られた敵はすべてにわたって殿の願いを妨害した。私は殿にアリストイを返し、殿の心が苦しんだ恐れを終わらせます。殿をアリストイが他人の腕に抱かれはしまいかという切ない悩みから解放します。更に為したいことがあります。私は殿に誇り高い敵、その傲慢さとリュジタニを合わせて譲ります。私はこの土地と、幸運にも殿の手に入ったすべてのローマ人を殿の支配に譲りましょう。遠大な計画においては、迅速に事を運ばねばなりませんので、詳細にわたってはお話ししません。私は明日大殿のもとに行くつもりだと言うことを皆に教えなければならないとは思っておりませんでした。しかし、私は確実な証拠を我が身に持っております。この手紙は私

の忠誠のよい証拠となるでしょう。殿は不実な輩の筆跡によってローマにはどれほど殿の隠れた敵がいるか知られるでしょう、奴らは皆、アリストイのために復讐に燃えてセルトリユスと関係を結んでいたのです。お読みください。

(ペルペンナはポンペに、アリストイがローマからセルトリユスに運んできた手紙を渡す)。⁽³⁰⁾

アリストイ

なんと、悪人なのか？卑怯者！おまえはよくも...

ペルペンナ

奥方、ここではポンペがあなたの主人であり、私の主人ですぞ。主人の前では、もう少し慎みを。私があなたに返答を強いたとしても、苦味なく、侮辱を交えずなさって欲しい、どなたの前でお話なさっているのかお忘れなく。ご覧のように、大殿、二人の有名な仇がおり、セルトリユスの死によって等しく憎しみに駆り立てられております。最後の最後まで、二人は私を侮辱しました。しかし、殿にお目にかかったからには、私は十分その仇をとったのです。私は大殿を守護神と同様に見立て奉っております、これはなんと言うことだ！殿、何をなさるおつもりか？

ポンペ

(手紙を読まずに燃やした後で)⁽³¹⁾、こんな秘密の何を予が知ろうとするものか、貴公が予を知っていたなら予見できたであろうに。ローマは長きにわたって二つの党派に別れてきた、予の故に再び分裂に投げ入れたくはない。シルラがローマに栄光と幸福を返したとき、予は殺戮と畏怖を取り戻そうとは思わない。聞くのだ、セルスス、

(ポンペはセルススに耳打ちする)⁽³²⁾、特に、アリストイがわしのためにローマでつくった敵について誰の名もあげないようにせよ。

(ペルペンナに)⁽³³⁾、貴公はこの弁士について行け、わしはいくつかの用件があって、ここで内密の話をしなければならぬ。

ペルペンナ

大殿、こうした手柄には、それなりの褒美が...

ポンペ

それはよく弁えているぞ、アリスティには裁きを与えるつもりだ、行け。

ペルペンナ

しかし、そうしてるうち、連中の憎しみは益々...

ポンペ

もういい加減にせい、予は指図するものだ、予が言っているのだ、行け、言うことを聞くのだ！

第七場

ポンペ、ヴィリアト、アリスティ、タミル、アルカス

威張りくさった口を利いたからといって、ご立腹なさらなくてください。偉大な女王、それは裏切り者を罰するためだけのこと。そなたのことを穿ちすぎた罪深さ、奴の卑劣に含まれた無礼、わしは女王に何か述べる前に自分を正当な者にするために奴をしっかり懲らしめねばならないと思った。こうして親しくお近づきになれたことに乗じようなどとは思わない。予は自分の成功を隠すことを知らなかった。今奥方から奴の支持が消え失せようとも、予はそなたに和平をさしのべ、休戦も破っていない。そして奥方の側にいるローマ人は予の怒りを恐れることなく、ここに留まってよい。もし何らかの危険から奥方を護ったとしたら、予は褒美としてただアリスティを連れて帰りたい。アリスティは、奥方もご覧のように予の主人であり、予は喜んで夫婦の誓いと忠誠を捧げる。愛については言うことはない、それは変わらずアリスティのものであった。

アリスティ

私も互いに交わしあった情けをあなたにお返ししましょう。新たにされた愛を一層固めるために、誰かがそれを盗んだことは忘れてしましましょう。

ヴィリアト

殿の提案された和平を受諾します。それは私が滅亡した後、できるただ一つのことです。私の滅亡は取り返しがつきません。殿に並び立つ大殿もわれに値する王も見つけられない以上、戦争も婚姻も放棄します。しかし、生まれついた王冠の誉れに執着しておりますので、正しい友愛の掟を守ることは知っても、我が王達が支

配するような支配の仕方は知りません。もし殿の支配のもとに、我が王達と同様支配しなければならぬなら、自分の滅びの下に埋もれましょう。恥もなく配偶者もなく支配できるとしたら、殿のローマか殿しか相続人として求めません。殿がお選び下さい。もし殿の同盟者が我が国々がわれ一人の勢力下にあるのが不服とあれば、殿がこの地を掌中に収めればよい。われはもうローマの虜とっております。

ポンペ

女王、あなたの心はきわめて生まれつきがよく、光輝溢れる平和を作り上げないわけにはいかない。そして、そこで予の権力がいつか倒れるのを見ることになるか、もしくは、いつまでも徳に榮えあらしめることになるかだ。

第八場⁽³⁴⁾

ポンペ、アリスティ、ヴィリアト、セルスス、アルカス、タミル

ポンペ

やり終わったのか、セルスス？

セルスス

終わりました、殿。二心を持った者はあまたの腕が己の殺戮を罰するのを見ました。殿の命令により怒り狂った民衆に渡され、何も言うことなく...

ポンペ

よろしい、ローマは安全になった。予が強い予を憎むようにし向けた人々も、予について恐れることは何もないのだから、予も連中を脅すようなことをする必要はない。そなた、女王、我らの偉大な英雄のためにその復讐された霊が全き平安のうちに眠ることを受け入れ給え。その名声にふさわしく、輝かしく壮麗な葬儀のために、女王の命令を与えに行こう。そして、殿の不幸の証人となる墓を建てるのだ。それは殿の栄光の証人でもあれば、我々の苦難の証人でもある。

幕⁽³⁵⁾

(註)

- (1) ヴィリアツスの死は紀元前139年、従って、この劇は紀元前71年に設定されている。
- (2) Et du consul Brutus l'Astre prédominant を Et de Servilius l'astre prédominant に変えればよいということ
- (3) 原文は、執政官ブルツスの優勢な運命、Et du Consul Brutus l'Astre prédominant, これを Et de Servilius l'astre prédominant, と変えればよいと言うこと。
- (4) (羅) Lusitania, ヒスパニアの地方で、イベリアの部族ルシタニア人の居住地。初めの首府は Olisipo(Lisbonne)、帝政時代に帝国の州となり首府は Emerita Augusta(Merida)
- (5) 年代は註1に示したように紀元前1世紀と推定される。それからコルネイユの時代迄およそ1700年近い開きがあるわけで、ローマ時代の古都市とコルネイユ時代の都市を同定するのは困難なはずだ。従って、コルネイユが言うようにネルトブリジとカラタユが同一という確証はない。又、コルネイユはカラタユ(Calatayud)と記しているが、この都市は今でも存続しており、現在の名前はカタラユ(Catalayud)となっており、コルネイユの錯誤かこの三百年の間に名が変わったのか不明である。
- (6) ローマ共和制末期の惨劇はよく知られたところである。追放、殺戮、略奪。なお、カルボンはマリウスの副官。
- (7) ローマ共和制末期、マリウス、シルラ、三頭政治家によって取られた、政敵制裁の手段。その名がフォーラムに張られると、誰もがその人間を殺すことができる。殺した者には報償が与えられ、それは殺された者から没収した財産であることもあった。追放という訳語が定着しているが、それは司法手続きのない過酷な人権剥奪だったのである。
- (8) 現在は、Huesca。サラゴスの北東、ピレネ山脈の麓にある。GDELによれば、人口41500
- (9) 原文では、セルトリユスが落ちている。前行のペルペンナの科白とこのセルトリユスの科白が合わさって12音綴になっている。
- (10) ヴォルテールは、セルトリユスは舞台上一人残っていると注釈しているが、それが合理的な見方だろう。
- (11) リュジタニの南部に定住した部族。
- (12) リュジタニの北部に定住した部族。
- (13) イレルジェットの君主、マンドニウスはその

- 兄弟。ヒスパニアの諸侯はスキピオー族と同盟したり、敵対したりしたが、結局は滅ぼされた。
- (14) シルラは綽名として、Felix と称していた。
- (15) (羅) Tiberius, ローマ市内を貫流する川
- (16) ローマにある七つの丘の一つ。
- (17) (西) Tajo, イベリア半島を流れる主な河川。スペインに発し、ポルトガルを経てリスボン湾に流れ込む。
- (18) 註の(9)を参照
- (19) アルプスから地中海へ流れる河川だが、ここではガリアの比喩として使っている。
- (20) Lucius Cornelius Cinna, マリウス党の人、執政官になること四度。反逆した兵士に殺された。
- (21) ポンペに破られ、死んだ。
- (22) シルラに破られ、自殺した。
- (23) ヒスパニアのローマ領に住んでいた部族
- (24) 上に同じ。
- (25) アルプスに発し、アドリア海に注ぐイタリア北部を流れる河川。
- (26) 執政官の威儀の象徴。
- (27) 上と同じ。
- (28) 哩=千歩の距離
- (29) セルトリユスを剣で斬った人物。プルターク英雄伝、巻8、38頁、岩波文庫版参照
- (30) ローマの将軍で、ペルペンナの陰謀に加担した。
- (31) 原文は括弧なしで、イタリック。
- (32) 上と同じ。
- (33) 上と同じ。
- (34) 上と同じ。
- (35) 原文は、最後の場
- (36) 原文は、五番目の最後の幕終わり
底本、Pierre Corneille, SERTORIUS tragédie,
Edition critique par Jeanne Streicher, Droz, 1959